

Newsletter

July 2021

<http://www.aack.info>

目次

平井一正さん追悼 (2021年2月15日逝去)	故平井一正君の思い出	中島道郎34
父へ贈る感謝状 廣瀬由仁子2	思い出すままに	並河 治35
平井一正先生と神戸大学山岳部・山岳会 神戸大学山岳会 会長 山田 健4	ポコさんを偲んで	西山 孝36
平井先生の思い出 神戸大学山岳会 前会長 居谷千春8	平井ポコさんを偲んで	芳賀孝郎37
平井一正先生と甲南山岳会 甲南山岳会 越田和男10	平井一正先輩への追悼文	藤本栄之助38
平井一正ポコさんの追悼、数々の思い出 斎藤惇生11	バルトロ氷河にて	古瀬駿介39
ポコさんの思い出 青野敏幸15	「温故知新」の人	前田 司39
発信しつづけた平井ポコさん 上田 豊16	ポコさん、よい一生だったね	松井敦男41
平井ポコさんとの接点 安仁屋政武18	素直さのお手本、平井一正先輩へ	松浦祥次郎42
平井一正 (ポコ) さんへ 井上 潤19	平井ポコとの70余年	本仁久一郎43
ゴローのポコ追悼文 岩坪五郎20	思い出の平井一正さん (ポコさん)	山本良三45
ポコさん 岩坪吟子21	ポコさんは勉強家	横山宏太郎47
平井先輩は伝説のクライマー 沖津文雄22	皆がほっておけない得な性分 —安岡良祐君を偲んで (2021年2月16日逝去)	栗田靖之49
希有なる岳人 ポコさんを偲ぶ 木村雅昭23	第52回雲南懇話会 講演概要	山岸久雄50
二足のわらじを記した文人 斎藤清明23	2021年度総会開催54	
山に生きた平井一正先輩 酒井敏明24	会員動向54	
平井ポコさんとの山歩きの思い出 阪本公一29	編集後記54	
ポコ追懐 左右田健次31		
ケチノーザン万福寺省エネ大兄 谷 泰33		

平井一正さん追悼 (2021年2月15日逝去)

父へ贈る感謝状

廣瀬由仁子



2015年6月15日撮影

2021年、4月3日。父の四十九日の法要を終え、筆を進めています。父なき書斎に行けば、パソコンをカタカタと打っている父、応接間に行けばテレビを見ながら欠伸をしている父、台所に行けばご飯を食べている父を思い出し、涙があふれてなりません。肩書は立派な父でしたが、家族の前ではちょうどサザエさんの波平のように、平凡でおしゃべりが大好きな父でした。その父のことを少し振り返ってみたいと思います。

私が幼い頃の父は、何日も帰宅しないことがあり、ある日、髭ボウボウの真っ黒な父が帰ってくる…ということが数回ありました。今から思うとヒマラヤなどの長期登山に行っていたのだと思います。でも、「何のお仕事をしているの?」と尋ねても、「ロボットを作っているんだよ」としか答えてくれず、なぜロボットを作るのに髭ボウボウになるんだろう、大きなリュックを背負ってどこに行くんだろうと不思議に思っていました。

また、お酒も大好きで酔っぱらって帰宅しては、玄関で寝ていたり、警察に抱えられて帰宅したり、ドブにハマってボロボロで帰ってきたり…。私の幼い頃の父の記憶は、熊のような髭

面か、ベロベロに酔って母に怒られている姿かあまりなく、いい思い出がありません(笑)。

また、よく山登りやスキーにも連れていってくれましたが、父は自分のペースで動くため、車酔いした私が「しんどい」と言っても休憩してくれず、バスを降りた瞬間、ゲロゲロと吐いてしまったことがありました。また、山登りの時も「足が痛い」と言っても、わざわざ遠回りをして新しいルート探しをするなど、マイペースで動く父についていけず、中学生になったころには、反抗期も重なり、父と山登りをしないようになっていました。それでも、そんな父の「常に何かに挑戦し続ける精神」は、知らず知らずのうちに私にも宿るようになっていたのかもしれない。

高校生の頃、父に誘われてドイツへ旅行したことがあります。「ワシはドイツで免許を取ったから」と、ドイツでワーゲンを運転し、ドライブ旅行をしました。が、運転初日に車をぶつけ、道に迷いながら宿を探す…そんなユニークな旅は私にとって初の海外旅行でした。フランクフルトやミュンヘン、ローテンベルグ…ドイツの観光都市を車で走りながら、予約せずに宿を見つける父との二人旅は、冒険に満ちた楽しい思い出のひとつ。大学生の時は、父がジャイカの仕事で滞在していたアフリカケニアに私も同行。単独でドイツ経由でケニア入りしたり、モンパサに一人旅行するなど、父をヒヤヒヤさせたりしました。

結婚後、私は実家の隣に住み、両親に甘えながらの生活をしていました。私に娘と息子が生まれると、父はとても子供たちを可愛がってくれました。自転車に乗せて、近所の古墳に連れて行ってくれたり、須磨の水族館に連れていってくれたり…孫たちと一緒に自然の中でよく遊ぶのが大好きでした。

2003年、父がルオニィ峰登頂へ向けて、準備を進めていた時、母が癌と判明しました。闘病中の母を私一人で介護しなくてはならず、不安でいっぱいでしたが、登頂はならずとも無事に帰宅してくれてよかったと思っています。それ以後は、私と二人三脚で母の介護をしてくれました。父と母はよく夫婦喧嘩をし、私が幼い頃は父がちゃぶ台返しをしたり、母が大根を振り回したり…物心がついた頃から私の記憶の中では、夫婦喧嘩が絶えず、仲良くしているふたりを見たことがありませんでした。でも、母の最期、「きよ子、きよ子～」と母の胸で泣く父を見て、父にとって母はとても大切な存在だと知り、二人はとても愛し合っていたんだと思いました。母亡き後、父は夫婦喧嘩をしていたことをすっかり忘れてしまい、母のいい思い出が残っていないと言っていました。人の記憶はうまくできているなあと思います。(笑)

母亡き後、私が心配したのは父が鬱になってしまわないか、認知症になってしまわないか、ということです。おそらく父自身もそれを気にしていたんだと思います。そこで、父に私が仕事で夕飯を作れない時は、ご飯のおかずを作ってほしいと頼みました。料理は頭を使います。最初は、調味料を加えず、油で炒めただけの野菜炒めを作ってくれました。恐ろしく不味い料理でしたが、「ありがとう～、助かるわ～」と言うと、とても喜んでくれて、どんどん新しい料理に挑戦し、腕を上げていってくれました。とにかく父の作る料理は、褒める！ せっかちの父は唐揚げやハンバーグは、中まで火が通っていないことがあり、子供たちから「おじいちゃん、生やで」と言われることがありました。とにかく「ありがとう、美味しい」と言うと、嫌がらずに家事を手伝ってくれました。得意料理はおでん。大根を米のとぎ汁でコトコト煮て、こんにゃくも別鍋で煮、おダシも丁寧にとって時間をかけて作る父のおでんは最高に美味しく、家族の大好きなメニューでした。「おじいちゃん、おでん食べたい」と子供たちがリクエストすると、「よし、待っとけ。明日おでん作るわな」と目を細めていたのを思い出します。あのおでんをもう味わえないと思うととても寂しく、悲しく思います。

交友関係が広がった父は、80歳になっても、登山愛好者たちと山登りを楽しんでいたり、食

事に誘われたり、人と会うことをとても楽しみにしていました。また、斎藤先生（Yさん）を信頼し、歯は岩坪ゴローさん夫人吟子さんの岩坪歯科に定期的に通って、健康面もとても気を使っていました。脊柱管狭窄症の手術や心臓のカテーテル手術はしましたが、日常生活も自立し、88歳の時に「ワシはな、8020（80歳でも20本の歯が残っていること）も大丈夫やし、頭も大丈夫」と元気なのが自慢でした。

それが崩れたのは、2020年の夏。ちょうど世界中がコロナ禍だった時です。お酒を飲むのが大好きだった父は、コロナのために飲み会をセーブしていました。私も高齢の父がコロナに罹るのが心配でしたし、家族にも影響が出るのを恐れて、外出は控えてほしいと伝えていました。「飲みに行きたい、飲みに行きたい」という父を何度説得したことでしょう。ある日、父がお腹が痛いというので、三菱京都病院に診察に行ったら、そのまま入院ということになりました。診断結果はクローン病。高齢者でクローン病は珍しいそうです。病名が判明してから、父は点滴だけで栄養を摂取する入院生活になりました。食べること、お酒を飲むのが大好きな父がものを食べることができず、運動もできず、父はどんどん弱っていきました。コロナのため、面会もできず、リハビリもしてあげられず、月数回の面会の時に風貌が変わっていく父を見るのがとても辛かったです。浪人生だった息子の受験を心配し、いつも「ロウマの受験は大丈夫か？」が口癖でした。それでも、クローン病の手術は成功し、12月に退院することができました。退院後は、点滴生活のため、体力不足で起き上がることができなかつたのですが、私がリハビリし、歩けるように回復しましたが、嬉しそうにご飯を食べ、お正月はお酒が飲めたらいいね、なんて話していました。ところが、微熱が続き、再診の際に検査入院となりました。抵抗力が落ちていたため、常在菌が体の中に入り、心臓弁を破壊しているとのことでした。心臓弁置換手術を12月28日にすることになりました。12月28日の術前に、「お父さん、頑張ってるね」と言うと、「オォ」と言って手を振ってくれたのが最後の言葉となりました。手術後、父の意識は戻らなくなり、小腸もばい菌に侵され、小腸全摘、1週間後には運悪くガーゼの取り残し手術、そして、腎不全、肝不全となり、

だんだん体力も弱くなっていきました。黄疸が現れ、心拍が低下し始めたのが2月13日。何度も夜中に呼び出され、そのたびに復活する父。お医者さんが「やはり登山家なんですね。こんなに心肺停止になっても復活されるのは珍しいです。」と言ってくれたのが救いです。

そして2021年2月15日、未明に父は息を引き取りました。ちょうど息子が大学に合格し

た知らせが届いた日でした。

「ロウマが20歳になったら、一緒に酒を飲みたいな〜」。それが父の夢でした。叶えられなかったけど、天国で見守ってほしいと思います。偉大な父ですが、家族にとっては本当にユニークでおしゃべりが大好きで、頑張り屋さんの父でした。家族を大切に思ってくれた父に感謝の気持ちを伝えたいです。ありがとう。

平井一正先生と神戸大学山岳部・山岳会

神戸大学山岳会 会長 山田 健

平井一正先生が神戸大学工学部計測工学科に助教授として赴任されたのは1964年、チョゴリザ初登頂から6年後、サルトロカンリ遠征から2年後のことである。赴任当初はその翌年春に計画されていたAACKのヤルンカン遠征に参加する予定で準備を進められていたが、ネパール政府の登山禁止令により登山許可が取り消された。そのようなことがあって、1965年になって神戸大学山岳部の副部長に就任され、現役部員の指導に当たるようになった。そのころの神戸大学山岳部・山岳会（以下「ACKU」）では、1953年以降山岳部長として部員の指導に当たっていた高木正孝先生（マナスル先遣隊、第1次登山隊隊員）が1962年、南太平洋のファッツヒバ島で学術調査中行方不明になった事件の直後であった。偉大な指導者を失ったところへ、チョゴリザとサルトロカンリというAACKにおける輝かしい経歴を持った平井先生が突然ACKUに登場されたのである。しかしながら必ずしもすんなりとACKUに溶け込んだわけではなかったようである。平井先生も著書「回想の60年」の中で「私の背景に京都大学があったために、はじめはなかなかしっくりとはいかなかった・・・」と書かれている。そのころのACKUのOB達はカリスマ性に富んだ高木先生の薫陶を受けて「高木イズム」に心酔した人たちで、平井先生には何か違和感があったのだろうと想像できる。私は直接高木先生を知らないが、聞くところによれば平井先生とは人柄や雰囲気はかなり異なっているようだ。しかし山に対する考え方の基本は同じであるように思う。平井先生はその後、1967年か

ら2年間ドイツ留学に行かれ、1969年に帰国される。このころからACKUではようやくヒマラヤ登山への機運が高まってくる。

ACKUではチョゴリザと同じ年に南米パタゴニアに戦後初の遠征隊を送り、その後もアンデスに2度遠征隊を送っていたが、ヒマラヤは未経験であった。そんなACKUが目標にした山はカラコルムのシェルピカンリ7380mで、サルトロカンリの北西約3kmに位置している。1974年に偵察を兼ねた第1次隊が送られ、登頂には至らなかったが、その登路を確認することができた。余談ではあるが、この年に新人として山岳部に入部した私はこの第1次隊の報告に非常に興奮したことを覚えている。1976年、いよいよ平井隊長に率いられた第2次隊がカラコルムに向かった。シェルピカンリは先生ものに述べられているように技術的に非常に困難な山で、いつ事故が起こっても不思議でなかった。隊長である先生は登山中神経をすり減らすような日々をおくっていた。それだけに初登頂に成功したときはうれしかったようだ。「もう二度と隊長はご免だと思った」と述べられているが、その後もACKUで2度、遠征隊長でヒマラヤに出かけている。チョゴリザやサルトロカンリの時のように一隊員としての成功ではなく、隊の全責任を負った隊長としての初登頂成功の喜びは格別のものであるということであろう。シェルピカンリ初登頂という大きな功績はACKU内での先生の立ち位置を確固としたものにするとともに、その登山隊員の中から先生の弟子と呼べるような者たちが生まれてくる。これは私の想像であるが、これ以降の先生のヒ

マラヤ初登頂への夢を果たすのは、ACKUの隊で実現していくことを心に決められたのではないだろうか。事実その後のチベット・四川遠征はすべてACKUを母体とした登山隊を組織されている。

しかし、1980年にACKUや平井先生にとって痛恨の出来事が発生する。シェルピカンリの成功に刺激された若手OB達（私もその一人）は次の遠征計画を同じカラコルムで進めようとしていた。その目標として、シェルピカンリの頂上からの写真に写っていたリモI峰7385mを選んだ。リモはシアチェン氷河を間に挟んでK12の東に聳える未踏峰でほとんど情報もなく、パキスタン側からは長大なアプローチを経なければ近づけない山であった。そこで、アプローチを探るために若手OB二人を派遣することになった。アプローチはサルトロ河を廻り、ピラフォンドラからロロフォンド氷河を下り、シアチェン本流を横断するルートである。これはサルトロカンリのアプローチとかなりの部分が重なるため、平井先生にとってはよく知っている地域であった。そのロロフォンド氷河で右田卓君がヒドンクレバスを踏み抜き転落、そのままクレバスから脱出できずに遭難死してしまった。平井先生にとってはサルトロカンリで通ったロロフォンド氷河である。若い会員がその場所で遭難してしまったことに心を痛められた。ACKUの会員たちの間では遺体を現地でそのままにしておくことは情的に許されないという意見が多く、ご遺族も遺体の回収を望まれた。そのため、翌年に遺体回収とご遺族を途中まで案内する目的で追悼隊の派遣が検討された。しかし、平井先生はこれに反対された。二重遭難の危険性に加えて、1年経過した後にはクレバスから遺体を回収することは極めて困難であることを認識されていたためである。ある意味現実的でドライなこの意見に対して、激しく反発し先生を批判する会員も多かった。様々な議論がされたが、結局追悼隊は出発した。現地に到達した追悼隊は、クレバスに残るザイルを見つけたが、その中は氷漬けとなっていて遺体を引き上げることができなかった。遭難した右田君は私と同期入部であり最も親しい友人であった。私はご遺族の付き添いという形で途中までこの隊に参加していた。ご遺族にとっては本当に過酷な旅であったが、ACKUが追悼隊

を送ったことによってある程度は心が落ち着かれたようだ。この遭難以後、ACKUはカラコルムから撤退し、チベットに舞台を移して活動していくことになる。

平井先生はシェルピカンリの帰途、飛行機でチベット・新疆の上空を飛び、その地に強烈にひかれたことが回想で述べられている。中国では文化大革命が終わり、徐々に外国に門戸を開きつつあった。チベットの山の開放も望みがでてきた。1980年、ロロフォンド氷河遭難の直前の4月に平井先生は初めて訪中している。神戸市と天津市が姉妹都市の関係だったことから、神戸大学が天津大学に送った学術訪中団の一員としてであった。この時に、わざわざ天津から北京へ行き中国登山協会（以下「CMA」）の史占春主席と会っている。この辺りの平井先生の行動力はさすがと思わせる。この時から平井先生とCMAの交流が始まった。その後毎年のように訪中しチベットの未踏峰の許可交渉をほとんど一人で行われた。交渉対象のピークも諸般のいきさつから、カンペンチン、ナムチャバルワ、クーラカンリ、ギャラペリ、ニエンチンタンラに亘った。ACKUでは平井先生のチベットに対する情熱を理解する少数の者がサポートをしていたが、このころの先生の孤独な交渉が一番苦しいときであったと思う。先生はCMAの信頼を得るため、京都のご自宅から神戸大学までの片道2時間の通勤時間に中国語を独学で勉強された。このため史占春主席と直接中国語で会話することができた。そして1984年10月の訪中の時、宴会場で史占春主席から「クーラカンリを第一希望として申請しなさい」と中国語でささやかれたという。果たして同年12月、ついに平井先生はクーラカンリ7554mの許可を手にした。これで一気に視界が開けていった想いであっただろう。さすがにクーラカンリの許可が来れば、なかなか動かなかったACKUも本腰を入れなさいといけなくなった。先生はさらにラサから成都までの東チベットの学術調査をCMA、中国科学院と交渉しその許可をも取得するのである。そうすると、神戸大学当局が乗り出して、各学部の助教授たちで組織する学術隊も一緒に派遣することになった。その後報道隊も組織され、日本人25名、CMA要員17人、中国科学院研究所の4人、総勢46人の神戸大学チベット学術登山隊が出来上が

る。神戸大学としては空前絶後の規模の隊となり、その総隊長に平井先生が就任される。これほどの大規模な隊となったことは、先生の本意であったかどうかは分からないが、何が何でも成功させなければという責任と莫大な資金の調達という重圧が先生に被さった。私は事務局の一人としてそばで先生を見ていたが、その重圧にピリピリされていたように感じた。幸い大学当局の全面的な協力を得て資金集めは何とか目標の1億円に達することができた。

1986年3月、学術登山隊は神戸を出発してチベットに向かった。ラサから南へ百数十km、モンダラという峠でクーラカンリと正対した。おそらく、先生はこの時に一目見てこの山は登れると感じたのではないだろうか。事実クーラカンリは登ってみて本当に素直な山であった。登路とした氷河もクレバスはほとんどなく、西稜はきれいな雪の斜面が続き、最大の難関とみられていた肩にある岩峰も見えなかった南側の雪面を巻くことができた。総隊長の平井先生はベースキャンプでデンと控えており、細かな指示は出さずに、登山隊の行動は上部キャンプに居た登攀隊長に任せていた。先生はルートが伸びてキャンプが作られていくことを静かに見守っておられた。先生はこのとき54歳であり、チョゴリザの桑原隊長と同じ年齢であった。何か判断するときには「こんな場合に桑原隊長だったらどのようにするだろうか」と自問した」と言っておられた。そして4月21日、クーラカンリ初登頂に成功する。この時平井先生はまさに人生の絶頂を迎えられたのではないだろうか。

ACKUはこのクーラカンリ遠征で二つの大きなものを得ることができた。一つは、CMAとの太いパイプである。クーラカンリ登山には、武漢にある中国地質大学から李致新はじめ5人の学生が高所協力員として参加し、主に下部キャンプ間の荷揚げを行ってくれた。彼らはその後CMAに入り、その中で頭角を現し、組織の実権を握っていく。李致新は現在の主席の地位にある。彼らとのクーラカンリ登山で培った友情は、その後の中国におけるACKUの登山に様々な便宜を図ってくれることになる。

もう一つは、東チベットにおいて未知の大山脈の情報を得たことである。学術登山隊がクーラカンリの成功後に辿ったラサ・成都間の川蔵

公路2200kmの旅のあいだ平井先生は常に上機嫌だった。初登頂の責任という重荷を下ろし、東チベットという憧れの地を旅して出あう山々や峡谷に毎日が喜びの連続であった。招待所では毎晩若い登山隊員たちと語り合った。その中で次の遠征に向けての期待が膨らんでいくのである。そんな時、ラサを出発してから7日後にラウーという標高4千mの小さな村に辿り着いた。ここでCMAの于良璞連絡官から重要な情報を得る。彼は「この奥に巨大な氷河を持つ山々がある」と言ったのである。それがカンリガルポ山群であった。

帰国後、平井先生と弟子たちは新たな目標カンリガルポへの挑戦を始めるのであるが、それは予想していたよりもはるかに長い道のりになる。マクマホンラインのすぐ北側にあるカンリガルポは、国境紛争地帯にあり外国人の登山許可は極めて難しいとされていた。そんな時にまたもや悲しい出来事が起こる。AACKの皆さんもよくご存知のとおり、1990年から91年にかけて梅里雪山に向かったAACK登山隊に雪崩が襲い日中17名が埋没する大事故が発生する。この隊には、クーラカンリの登山隊員であった船原尚武君がACKUから参加していた。船原君をAACKに推薦したのが平井先生であったので責任を感じておられた。船原君はACKUのエースであり、大学院卒業後は神戸大学に研究者として残る予定であった。平井先生はご自分の後継者として船原君を育てる決心をしていたのである。先生はよく「掌中の珠をなくした」と嘆かれていた。後年(2016年)クーラカンリ30周年の年に平井先生と居谷千春山岳会会長(当時)と一緒に私は雲南省明永村にある慰霊碑にお参りをした。私と船原君とはクーラカンリでペアになり常にザイルを組んでいた間柄であった。彼が生きていたらACKUはもっと発展していただろう。

1996年3月平井先生は神戸大学を定年退官された。同時に山岳部長を退任されて、その翌年山岳会長に就任される。名実ともにACKUを代表する人になられた。退官された後、甲南大学で教鞭をとられることとなった。神戸大学と甲南大学は阪急の駅一つを挟んでごく近くにあるため、ACKUの弟子たちは図々しくも先生の研究室を毎週訪ねてはカンリガルポの計画を練った。最高峰とされているルオニイ峰を目

標として1996年に登山申請をするがなかなか許可が下りなかった。カンリガルポにはそれまで登山隊が入ったことがなく全くの処女地であった。平井先生にとってカンリガルポは久恋の地となっていた。そしてようやくCMAの李致新らがその難関をこじ開けてくれることになる。2003年、ACKUは正式な登山許可を世界で初めて取得し、カンリガルポへ登山隊を送った。隊長は平井先生、すでに72歳になっておられ、普通なら名誉隊長として、現地は若い隊長に任せるところであろうが、やはり現地に行きたいという気持ちが強かった。出発前に奥様が肺がんに侵されていることが判明し、出発するかどうかわれた。しかしどうしても自分の最後の遠征を完成させたかったのだろう、後ろ髪を引かれる思いで出発された。しかし、カンリガルポは手ごわかった。天候の悪さ、地形の複雑さに苦労しながら主峰直下千mまで迫ったが、そこからの千mの雪壁に取り付くには極めて危険だと判断され登頂を断念している。先生にとって5回目となる最後の遠征は、初めて登頂できなかった遠征となった。

2006年、平井先生は山岳会長を辞し井上達男先輩に引き継がれた。井上会長はシェルピカンリの登頂者で先生が最も信頼している弟子である。先生はやり残したカンリガルポの初登頂を井上会長に託された。その年の秋、クーラカンリ登頂20周年の祝賀会を神戸で開催し、そこにCMAの李致新副主席（当時）らを招待した。この機会を利用してカンリガルポへの再挑戦の協力をお願いしようとしたのである。ところが祝賀会の3日前だったと記憶しているが、メインホストである平井先生の奥様がお病気で亡くなられた。山岳会事務局長であった私は葬儀場で先生に祝賀会欠席の確認をしたところ、なんと出席すると言われた。さらにCMAの招待者に余計な気を使わせないようにACKU会員に緘口令を布いてくれと言われた。私は平井先生のカンリガルポへの強い意志を感じたが、同時にこのことをお嬢さんはどう思われるだろうかと心配したりもした。祝賀会は成功し、カンリガルポへの登山計画も、副主席の母校である中国地質大学との合同という条件で協力を得られることになった。中国へ帰国後に奥様が直前に亡くなったことを聞いた副主席はACKU側の配慮にいたく感動したとのことであった。

このような経緯があって李致新副主席は、きわめて難しいカンリガルポへの登山許可を再びACKUにもたらししてくれたのである。

2007年、ACKUと中国地質大学は私を隊長として再度偵察隊を送った。というのも、現地の写真を調べていくうちにルオニイが最高峰かどうか怪しくなってきたためである。ルオニイの北西にある二つのピークもルオニイに匹敵する高さがあることが分かってきた。そのため偵察隊は現地で測量をして高さ関係を比較するとともに、改めて三つのピークの登路の確認をするという目的であった。しかし、外国人の測量は中国の法で禁じられていると、連絡官に測量用トランシットを取り上げられてしまったため、高さの比較ができなくなった。それでもルオニイと二つのピークを観察して、やはりルオニイの最後の千mの雪壁は極めて危険である、一番北西のピークも登路が見いだせない、しかし真ん中のピーク（のちに「ロプチン」と命名；6805m）が一番立派で登路も南東稜から行けるだろうという感触を持って偵察を終えた。帰国後、私は目標をルオニイからロプチンに変更することを提案した。平井先生がどう思われるか危惧していたが、先生は賛成してくれた。

2009年、ACKUと中国地質大学はロプチン峰初登頂を目指して合同登山隊を送った。日本側は井上隊長、私は副隊長として参加した。この年はカンリガルポとしては異常に好天が続き順調にルートを伸ばし、11月5日に中国地質大学のチベット人学生が2名、7日にACKUの2名が登頂を果たした。これは全カンリガルポ山群において最初の登頂であり、2021年の現在においてもこれが唯一の登頂記録となっている。平井先生はこの成功をことのほか喜ばれた。下山後、中国地質大学で登頂祝賀会が催されることになり、これに出席するために平井先生は武漢に来られた。私は先生を出迎えるために武漢空港の到着ロビーで待っていたら、にこにこして平井先生が出てこられ、ようやく、ようやくと誉めていただいたのを覚えている。ACKUのカンリガルポ初登頂が悲願の成就であり誇らしかったのであろう、以後「神戸大は日本一の大学山岳会になった」ということをよく口にされていた。

2019年11月、ACKUではロプチン登頂10周年と平井先生の米寿を祝う会を開いた。こ



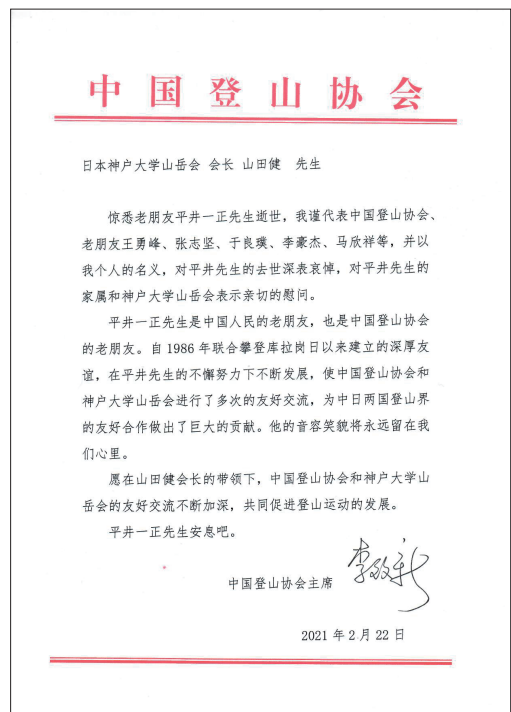
平井先生と筆者 2009年11月ロプチン峰登頂後中国地質大学にて

れが平井先生にとってACKUの最後の公式行事となった。終始にこやかに過ごされ、とても米寿とは思えないぐらい若々しく見えたので、もっともっと長生きされと思っていた。2020年1月に最後にお会いしたとき、新年度から山岳会長を引き受けることがほぼ確定していた私は、先生に「会長になったら何をしたらいいですかね?」と尋ねてみた。「そんなもん自分で考え、ただな、CMAとの良好な関係は続けてくれ。神戸にとっては大きな財産や」と言われた。それ以後、コロナ禍でとうとうお会いする機会がなかったのでこれが遺言になった。平井先生が亡くなられた翌日にCMAあてに先生の訃報を伝えたところ、李致新主席から弔意文が送られてきた。一部を抜粋して日本語訳すると、

「平井先生は古くからの中国人民の友人で、古くからの中国登山協会の友人でもあります。1986年のクーラカンリ登山以来、先生の継続した努力により、中国登山協会と神戸大学山岳会の度重なる友好交流と深い友情を打ち立て、

日中両国の登山界の友好に大いなる貢献を果たされました。先生の優しい笑顔は我々の心に永遠にとどまります。」

平井先生のこれまでの登山人生を見て、運のいい人だと言う人がよくいる。ご自分でもそのようなことを言われたこともあった。しかし、単に運がいいだけではなく、努力し忍従して幸運を引き寄せてきたように私は思う。平井先生は紛れもなく私にとっては師である。登山だけではなく生き方の師であった。先生とお会いできたからこそ私の人生がより充実したものとなっていると思う。本当に先生には感謝しかない。



CMA 李致新主席弔意文

平井先生の思い出

神戸大学山岳会 前会長 居谷千春

私が神戸大学理学部の現役学生だった頃、山岳部副部長であった先生の工学部計測工学科の研究室に山行計画書を届け注意事項を聞いて来るというのが私と先生の関わりのスタートだった様に思う。六甲台の山岳部部屋にはあまり来

られなかったので恐る恐る研究室の扉を叩いて在室かどうか確かめる、不在なら机の上に計画書とメモを置いて帰ってくるのが常であった。

槍ヶ岳千丈沢で事故があり先生が急遽入山さ

れた際、一緒に信濃大町まで下山した。大町で銭湯に入った時に石鹸を身体に塗りたいってそれを手で伸ばして身体全体をこする方式にはすっかり影響を受けてしまったが、その頃からゆっくり先生と話をする様になったと思う。システム工学の単独研究棟に移られてからは理学部と隣接するので時々是一緒に帰ることもあった。

AACKの仲間のニックネームのことや、今の研究テーマ、「地下街で地震や火災があった際、大衆はどういう風に逃げるかをコンピューターでシミュレーションしているんだ」とかいうようなことを話していただいた。阪急六甲駅から十三駅まではずっと一緒だったので私が喋ることに随分興味を持たれた。信州大学に行って豪雪の70年南アルプス甲斐駒ヶ岳で遭難行方不明になった兄のことなど随分と心を置いてくださった。それから50年、先生のおかげで知り得た人・一緒に山に行ったり酒を呑めたりした人はとても多い。1985年正月、遠くシンガポールまで「ハローイタニ！クーラカンリがとれた。是非一緒に行きたいものだ」と誘ってくれたのも平井先生、今は感謝するばかりだ。

先生は奇妙奇天烈な話が特に大好きで、何かの拍子でコックリさんの実験をすることになった。システム工学の研究室のある晩、事務の女子職員2名、先生と私、部屋を暗くして模造紙に鳥居のマーク・ひらがな一式・アルファベット一式、そして「はい・いいえ」マークを記入し鳥居マークの前にガラスコップを伏せて置く。お供物は甘い菓子、四方からそっと伏せたコップに指を添えて「コックリさん来てください」と繰り返し唱え来訪を待ったが最初の1時間ほどはなかなか到来の兆候がなかった。少し休憩し供えものを変え北の窓を少し開けて「念」を込めて再スタートすると、おもむろにコップが動き出し各種質問に徐々に反応し始めた。もう内容はあまり覚えていないが、できるだけメ

ンバーが知らない質問をしてコップが止まったところの文字をつなぎ合わせてお告げ（答え）とするものだが、動きが速くなったあとはコップの動きのスピードに指が追いつかず一人を記録者にした。当時一般的には恣意的にコップを押す力を調節しているに違いないとか集団催眠によって動かしているとか言われていたので、目をつぶったり4人を3人に、3人を2人に、2人を1人にした実験を進めた。2人になった時には単振動に、1人になった時は動きが止まるのが印象的であった。ただ実験（遊び）を終了して六甲の街の夜景を見下ろしながらの帰宅時に女子事務員のポニーテールの髪が引っ張られるような感触で頭がカクンとなることが数回あり、妙なものに取り憑かれてはいかんとその後はそういう実験はやめた。コックリさんについては後日談がある。1976年ラワルピンジーのホテルの一室、どういうきっかけでやることになったかを覚えていないが観光局のアワン氏の強い希望で実施した。きっと平井先生が口を滑らせたに違いない。「こういうことはパキスタンでもやっている、しかしこれはあまりいいことではない。」というのが彼の論評であった。それ以降は先生も私も一切やっていない。シェルピカンリのテントの中、すでに「オカルトの居谷」といわれだした私は先生とはそんな話ばかりやっていたような気がする。

雪山の空気の澄んだ早朝、山の端から太陽が姿を現す最初の一瞬の光にはすごいエネルギーがあって、それを手の平の真ん中のツボで受けるとジリジリとして力が湧いてきますよ！と私がいうと素直に右手を日の出の方向に向けて、手の平でその力を感じてくれる先生、面白がってくれる先生からは随分教えられることが多かった。ウルドゥー語や中国語だけでなく、物事をなすのに必要なものに向き合う真摯な努力の姿はよく語られる話だが、私にはいつも限らない好奇心と笑顔が思い出されるばかりである。先生のご冥福を祈ります。

平井一正先生と甲南山岳会

甲南山岳会 越田和男

1995年（阪神淡路大震災の年）、神戸大学を定年退官され、甲南大学の理学部教授に就任された平井一正先生は、甲南大学山岳部にとって正に救世主。その頃山岳部は顧問を引き受ける教員がなく、存亡の危機にあった。当然のごとく、平井先生に顧問就任を打診することになるのだが、平井一正氏といえば岳界での超大物。果たして何事も甚だエエカゲンな甲南山岳部、山岳会に馴染んで頂けるのかと大いに危惧する声もあったなか、当時の学園理事長で山岳部OBでもある小川守正さんからの顧問就任の要請に快諾を頂いたのだった。聞けば先生は既に自ら山岳部の部室に出向かれて、部員と接触されていた。以来、山岳部の顧問としてご指導を賜った数年間、その後の甲南山岳会の名誉会員としての二十余年間のご交誼にあずかることになった。

先生の気さくなお人柄に触れて、甲南の諸氏は安堵したのだが、先生の長年の山関係の濃く幅広い交遊の中で、ほんの一隅に過ぎなかったであろう甲南の印象はどうだったのか。甲南山岳部・山岳会の機関紙『山嶽寮』に度々寄稿されているが、まずは全く違和感なく、旧制高校出身の七十代、八十代から若手OB連中までの年齢を感じさせない和気藹々な山好き集団に気を良くされたい。「甲南のお年寄り元気ですな。食い物が違うんかな」などと冗談を飛ばされていた。

甲南在職中の1999年夏には、「センチネル峰登山・スワート・ヒンズークシ踏査隊」に参加された。六十代3名、五十代1名に二十代の現役山岳部員2名からなるパーティで、68歳で最年長の先生は顧問として計画段階から参画された。5260mのセンチネル峰を望見して、隊員から「先生はチョゴリザ以後まだヒマラヤの頂上を踏んだことはないでしょう、ぜひ登りましょう」などと言われ、何とかして登るつもりで4770mのC-1まで頑張られたのだが、高所障害をとまなう体力の限界を自ら判断、登頂を断念され悔しい思いをされた。

この隊では最年少の現役部員が体調を崩し、

高山病を発症、肺水腫の兆候を見るに至り、米山悦朗隊長が付き添って緊急下山させることに。ロバで8時間、車で一昼夜不休の25時間でイスラマバードの病院で入院治療を受けことなきを得たが、かなり危なかった。数々のヒマラヤ遠征登山を全くの無事故で成功を続けてこられた先生の輝かしき山歴に危うく傷をつけるところだった。逆に言えば先生の無事故伝統に守られたのかも。

先生とのご縁で印象深いのが、先生がお書きになった「AACK人物抄・伊藤愿」。AACK初期会員として活躍された伊藤愿さん（1908～56）は旧制甲南高校山岳部出身ということで、資料集めのお手伝いをしているうちに、偶然にも愿夫人房子さんの消息がつかめ、東京は青梅の病院に入院中の房子さんへの取材を兼ねたお見舞い訪問が実現した。人物抄は『AACK Newsletter』（2005年3月号）に掲載され、更に甲南山岳会のホームページに転載されると、時を経て偶然の人づてで愿さんの次女・松方恭子さんの知るところとなり、伊藤愿さんの未公開の書簡を含む遺稿集（松方恭子編『妻におくった九十九枚の絵葉書—伊藤愿の滞欧日録』清水弘文堂書房2008年）の上梓へと繋がる。その経緯は平井先生による本書の紹介記事『AACK Newsletter』（2008年11月号）に詳しい。松方家主催のその出版記念会には日本山岳会を始め多数の山仲間が集い、AACKからも平井先生とともに、西堀栄三郎さんから託された愿さんの遺影をヤルンカン頂上に埋めてこられた上田豊氏も参加、スピーチされた。これでまた、先生を中心に山・人・本の絆が広まった。

2009年、神戸大学の「カンリガルポ山群学術登山隊」（隊長：井上達男氏）には、先生の推薦で、甲南山岳会から、山本恵昭が部外者ながら登攀リーダーとして参加させてもらった。KG-2（6708m、後にロブチン峰）を登頂し下降中の極度に疲労した若い2名の隊員を天候悪化の兆しのあった暗闇の中誘導して生還させたのだが、彼が居なかったら危なかったのではないかと言われた。ここでも彼を推した先生の無

事故伝統が働いたのではないかと私は思う。

晩年、伊那・松川にある雨宮宏光さんの山荘には、屢々顔を出された。板敷のワンルームに6～7名がゴロ寝。たいていは二泊三日で、中一日を伊那谷周辺の軽い山歩きというパターンで、先生の温顔を囲む談笑が毎夜深夜に及び、心底楽しまれていた風だった。残念ながら、甲南山岳会へのお便りは「米寿も過ぎて、今は元

気にしていますが、いつお迎えがくるかわかりません。心臓にガタが来て今は登山はできません。皆様のご健勝をお祈りします」(『山嶽寮』第75号2020年)が最後となってしまった。甲南では最も親しくしておられた雨宮さん、平井吉夫、大関和夫の諸氏が一足先にあちらを偵察済みでお待ちしています。どうか旧交をお温め下さい。ご冥福をお祈り申し上げます。

平井一正ポコさんの追悼、数々の思い出

斎藤惇生

平井一正ポコさんは、AACKではチョゴリザの初登頂者、サルトロ・カンリの隊員、神戸大学山岳会では自ら計画し総隊長として隊を組織し先ずカラコラムの難峰シェルピカンリ、次に中国チベットにある世界登山界の垂涎の山クーラカンリ、四川省の雀児山、さらにカンリガルボ山群のルオニイ峰、ロブチン峰(平井不参加)と登り、ルオニイ峰以外すべて登頂成功し登山において一人の事故も無かったことを誇りにしていた。登山者として強い運に恵まれていたと言えるだろう。

しかし昨年9月以降、平井の罹患した病気はいずれも珍しい難治のものばかりで、ついに2月15日亡くなってしまった。

最後の病歴

昨年9月9日、腹痛があり三菱京都病院受診、炎症の検査のCRPが高く入院した。2週間退院した。主治医からの報告では、大腸炎であった。間もなく9月25日強い腹痛があり再受診した。腸閉塞の診断で再入院した。回腸(小腸)が大腸に移行する部の炎症で腸閉塞があり原因はクローン病だった。クローン病は普通若い成人に起る疾患で難病に指定されている。80歳代に発生することはごく稀である。クローン病に効く高価な薬も使われたが腸閉塞は改善せず、閉塞部を切除して小腸と大腸を吻合する手術を受けた。12月上旬やっと退院した。

しかし12月10日退院後初めての受診で炎症のCRPが上昇しており、又入院となった。心エコー検査で感染性心内膜炎の診断で循環器内科で治療開始、感染源細菌は抗生剤抵抗菌

だった。細菌の塊(疣贅)が心弁膜につくと弁機能が悪化して心不全を起す。12月28日大動脈弁置換術と僧帽弁形成術が施行された。26日電話があった。「心臓の手術を受けることになったが、大丈夫だろうか?」私は「三菱京都病院は心臓の手術をたくさんして上手だから大丈夫」。これが平井との最後の会話になった。

手術は無事成功したが平井は麻酔から覚醒せず意識が無かった。頭部のCTで脳出血があった。正月腹部に異常があり1月3日緊急開腹、小腸を支配する上腸管動脈が血栓でつまり小腸がほとんど壊死状態になっており、小腸の大部分が切除され、人工肛門が造設された。残念ながら意識は依然回復しなかった。

新型コロナウイルス感染症のため、すべての病院が面会謝絶になっている。それで入院後見舞できなかった。2月5日娘の由仁子さんの申入れで三木名誉院長と主治医の江崎医師の立合いで見舞った。主治医より腎機能が悪化して週3回の人工透析、肝機能も悪く、黄疸があると説明を受けた。病床へ行って顔を見た。むくんで黒黄色だった。「ポコさん」と耳許で呼びかけた。目をしばたいたように思った。この状態では一ヶ月もたないと感じた。由仁子さんは一回でも目をあけて一言でも話して欲しいと切望していたがそれもかなわず2月15日息をひきとってしまった。

私は90歳以上の患者さんが亡くなられた時、御家族に「御長命でしたね。天寿を全うされました。」と言っていた。ご家族はみな納得した顔をされた。平井も90歳で天寿を全うしたことになるのだが、入院まで元気だったことを

知っているのでもだまだ天寿が残っていたように思えて仕方がない。

平井ポコと中国の山

平井はチョゴリザ登頂の後近くの山に芳賀と登り、7000mの高度で北に茶褐色に輝く青藏高原を見て深く感動した。それ以来チベットに何時か行ってみたいとの夢を持ち続けた。そして来る日を期待して1976年からラジオ、テレビ、中国人留学生相手に中国語の習得を始めた。

1980年神戸大と天津大の友好提携の学術訪中があり、平井はすすんで秘書長となり参加し念願の中国の大地を踏んだ。そして寸暇を使い北京の中国登山協会（CMA）を尋ね副主席で実力者の史占春に面会、登山計画書を提出し実現を依頼した。中国は文化大革命の混乱が治まり国内情勢が落ち着いてきた1980年に国内の山を初めて外国登山隊に開放した。先ず日本にチョモランマ、西独にシシヤパンマの2座だけだった。横山宏太郎、甲斐邦男と私は、日本山岳会のチョモランマ隊に参加した。中国は1981年から次々と山を外国隊に開放していった。1981年には29座の開放だった。

平井は1981年CMAより招請があり訪中した。CMAから先に提出した希望のナムチャバロワ、クーラカンリは未開放で今は困難、開放地域のカンペンチンの1983年の許可があった。1982年は神戸大側の事情があり1983年にした。

この時AACKはランタン・リをネパール側より登る計画をした。しかし登攀ルートがかなり中国領になっていることが分り、中国側よりの登攀に変更し、横山を隊長に偵察隊を派遣した。しかし事情を知らぬ他の日本隊がネパール側より登頂してしまった。そのため目標の山をランタン・リの北にあるカンペンチンにした。上尾と私は偵察隊の出迎えとカンペンチン登山の交渉に北京に行った。CMAは1983年に神戸大に許可を出している、1982年に登るなら平井の了解を得てくれとのことだった。私はその場から平井に電話した。運よくすぐつながった。1982年のカンペンチンの了解を求めた。平井は1982年は神戸は動けないのでAACKの1982年のカンペンチンを了承してくれた。この時もし平井が優先権を主張していたらCMAはAACKに許可を出さなかったと思う。有難いことに平井は辛い決断をしてくれた

のだった。

クーラカンリと横断山脈学術調査

1982年12月友好関係になった天津大学で講義する機会があり天津に行った。北京にも行きCMAで史占春に会って交渉した。ナムチャバロワとヤールツァンポを挟んで北側にあるギャラペリの許可を申し入れた。

1984年5月ギャラペリを神戸大、日本ヒマラヤ協会、大分岳連の三団体合同で許可すると連絡があった。平井は合同隊は意思の統一が困難で危険が多いと合同に不賛成だった。

10月に単身北京に行き合同ならギャラペリは諦めると申し入れた。CMAもこれを了解し他の山の希望を聞いた。カンペンチンの件や単独での許可をできなかったこと、そして何よりも平井の熱意が伝わって最終的に未開放で困難と言っていたクーラカンリの登山許可が12月25日に連絡があったのだった。

平井はまた三江併流する横断山脈に入る夢を持っていた。公路が成都から横断山脈を通過してラサまで行っていることは知られていた。しかし危険の多い難路でそのような秘境に許可が出る筈がないとみな思っていた。平井はクーラカンリの正式登山申請書を提出する時、断られてももともとと思いながら横断山脈の学術調査通行を付け加えて申請した。多くの面倒な紆余曲折を克服して、中国科学院と合同での許可を獲得した。

神戸大学は全学をあげて登山隊と学術隊を組織し平井が総隊長となった。先輩宇野宗佑代議士を会長にして後援会が成立。朝日新聞と朝日テレビの後援も決まり特派員が同行した。膨大な募金も真夏汗水たらしての努力で順調だったと書いている。

シェルピカンリの時、総隊長を引受けたらきよ子夫人に「あなたは総隊長の器でない。予期せぬことが起ったらあなたはオタオタする。隊員が苦勞する」と言って反対された。しかし平井はリーダーはかくあるべしとチョゴリザの時の桑原武夫先生の教えをもとに覚悟を決めて行き、みなを指揮して難峰の登頂に成功した。よほど辛い思いをしたのかもう二度と隊長は御免だと思って帰国したようだが、クーラカンリではまた総隊長となり登山隊学術隊の先頭に立ったのである。

平井は1978年過度の疲労から狭心症を起し2週間入院した。それが不安で冠動脈の造影検査を受けた。医師は5000mぐらいまでなら大丈夫でしょうと言った。平井は私に相談に来た。著書『初登頂』のなかに私が「人間はいつか死ぬ。びくびくするな。チベットで死んだら鳥葬してもらえる。自分の魂が空に帰るのはなんとすばらしいことでないか」と言ったと書いてある。平井は自分が夢み計画し実現したこの壮大なパイオニアワークの登山と探検に行くに決っている。私の言葉は医者としては一寸無茶だが、彼への励ましと慎重行動への心がまえになったと思っている。

1986年4月21日に4人、22日に2人の隊員がついに天帝の峰クーラカンリの初登頂に成功した。平井は登攀する隊員をBCから望遠鏡で見っていた。空は晴れており連日吹き荒れた強風も幸い止んでいた。登頂の瞬間、平井は于良璞連絡官と抱き合い喜びの涙を流した。苦労が多かっただけに感激も大きかった。

登山終了して登山隊は先行し学術調査をしている学術隊の後を追いつ川蔵公路を車で走り無事成都に到着した。横断山脈の学術調査報告は一冊の報告書が刊行された。

雀児山（チェルーシャン）

クーラカンリ隊に特別に派遣してもらった武漢地質大学よりの高所協力隊員が5人いた。そのなかに李致新（現CMA会長）と王勇峰がいた。2人はナムナニの中国側登山隊員だった。平井はこれを機会に日中友好の促進に寄与すべく武漢地質大学との合同登山を考えた。申入れに武漢側が合意し友好協定が調印された。そして1988年に武漢大と神戸大の若い学生、研究生を主力にした日中合同隊が四川省の未踏峰雀児山（6186m）に登頂した。立案者の平井は名誉総隊長だった。

カンリガルポ山群

チベットの南東部にある6000m級の美しい未踏の高峰が連なるカンリガルポ山群は中村保氏の頻回の踏査に詳細な報告と写真、AACK会員でもあった福岡の松本徃夫氏たちの調査報告で1990年代後半より知られ注目されるようになった。クーラカンリの帰途に于良璞連絡官から美しい未知の山群があることを聞きカンリ

ガルポは平井のまた新しい夢と目標になった。2003年秋にそれが実現した。目標はルオニイ峰（6886m）だった。平井は隊長として現地に赴いた。72歳だった。登山はルートの困難と天候の悪化で撤退した。平井は帰ってからBCで寝ていてこれまでにないくらい寒かったと言っていた。高齢になるとパイオニアスピリットは衰えなくても耐寒力はひどく低下する。

平井が出発する前、きよ子夫人は肺癌が診断され治療中だった。癌は最も悪性の小細胞癌だった。この癌は最初抗癌剤がよく効いて治ったかのようになる。しかし必ず再発し予後は悪い。かなり心配したような顔で相談に来た。「ルオニイに行ってもええやろか？」だった。私は夫人の癌が抗癌剤が効いて小康状態だったので今なら行ってもいいだろうと返事した。彼がどのように夫人に言ったか知らないが出発した。

夫人が平井の度々の遠征に反対したことは一度も聞いたことは無かった。夫人は平井が登山家、チョゴリザ登頂者であることを尊敬し結ばれたらしい。今回は悪性の病気を持ちながらもけなげに承知したと思う。

夫人の症状は徐々に進行した。2006年に亡くなられた。身の動きが辛くなってきた時、平井はかいがいしく介護したらしい。食事も作れるようになり本人が言っていたのだからごんぶらもフライも作った。抱えて風呂にも入れたそう。いい罪ほろぼしになったと誉めてやった。

2009年には神戸大隊は武漢地質大学と合同で富士山によく似た秀麗な山容のロプチン峰（6708m）の初登頂に成功した。カンリガルポ山群で初めての登頂であった。

平井の病歴は多彩だった

平井は京大山岳部に入部してから国内、海外の山によく登っており一見きゃしゃな感じだが山では強かった。これはみな認めている。しかし40歳代の後半から割合、いろいろ病気を経験している。最初は1978年に過労から狭心症を起し2週間入院した。心電図で心筋梗塞があった。それから4年ほどあまり登山しなかった。1983年南アルプスの甲斐駒と仙丈岳に登り自信を取り戻した。1986年にはクーラカンリのC1（5760m）まで登った。

しかし1992年登山中胸が苦しく、翌日顔がむくんだ。神戸大の保健センターを受診し大動

脈弁閉鎖不全と心エコー検査で診断されもう山はだめですと宣告された。1993年9月火打山に登り異常なく心臓のことは気にしなくなった。同じころ半年ほど腰椎椎間板ヘルニアで腰痛下肢痛で苦しんだがりハピリテーションに通い治っている。1993年4月には阪急六甲の坂で転倒胸部強打呼吸が苦しくなった。帰宅してから私に電話があった。状態を聞いてすぐ新河端病院に来院させ胸のレントゲンを撮ると肋骨骨折と肺が損傷し気胸と血胸が起っていた。すぐ尖った骨切端を削り、胸腔に持続ドレーンをして入院させた。経過良く2週ほどで退院している。

斎藤診療所のカルテを見ると1992年高血圧で初診になっている。心臓のことも聞き降圧剤の投薬を開始した。1ヶ月1度ほど通院した。2000年頭部のMRIを撮った。脳梗塞が多発していた。その頃開発された抗凝固薬（血液サラサラの薬）を投薬した。その後何回かMRIを撮ったが進行しなかった。

2007年には下血があり入院した。大腸の検査で大腸憩室炎が数個あってそれからの出血だった。

スキーで骨折を2回している。最初は1977年冬京大山岳部の合宿に参加して笹ヶ峰へ行った。妙高の斜面を下りヒュッテの近くで転倒歩けなくなった。一晩痛む下腿を冷やし翌日はスキーをして下った。妙高国際スキー場で滑れなくなり担架で運んでもらった。一人で汽車を乗りつぎ京都の家に帰った。翌日無理して大学に行った。痛む足に力が入らぬので新河端病院にきた。脛骨骨折だった。骨折部のずれがないのでギプス固定した。この後松葉杖について大学に通った。

もう一回は1999年12月31日に骨折した。平井はスキーが上手だった。自分でも若い人に優越感を持てる唯一のスポーツと自負していた。シュテムクリスチャニアが得意で林間をスイスイと滑っていた。今回はその自信が災いした。笹ヶ峰に入り滑ったのだが三田原の下りで高尾マッコウの後を滑っていて転倒し動けなくなった。マッコウはプロ級の滑りをする。すぐ後を負けじと滑ったのが間違いだった。ヘリコプターで新潟労災病院に運ばれ片方の下腿骨が3箇所骨折していた。仮固定してタクシーで京都に帰った。10数万円かかった。1月3日新

河端病院にきた。即入院整形外科で固定手術した。幸い後遺症なく治った。

2010年ころまで高血圧が2剤でコントロールできていた。それが朝起床時最高血圧が180もあり続いた。朝の高い血圧はモーニング・サージ（侵襲）といって脳や心の合併症の引き金になるとされる。薬を変えたり増量したりして朝夜各4種類の薬を投薬したがなかなか安定しなかった。

2017年に腰椎椎間板ヘルニアが再発し増悪して歩行困難となった。県立尼崎病院にいる脊椎外科手術の名医西浦医師を紹介して手術を受け良くなった。その時の検査で時々心房細動の不整脈を起すことが分った。

2018年ごろからなんとなく疲れる、しんどいと訴えるようになった。念のため三菱京都病院心臓内科を受診させたが1997年に指摘された大動脈弁閉鎖不全と僧帽弁の異常があった。特に現在治療は必要ないとのことだった。平井が気にするので心房細動のカテーテルアブレーション手術で治してもらった。しかし疲れる、しんどいの訴えは続いていた。そして2020年9月から厄介な難病にかかってしまったのだった。

サルトリ・カンリで発電機製作

チョゴリザで隊員たちにむくみが出た。桑原隊長はBCに下りてきた芳賀と岩坪の顔を見て「私はドキッとした。顔にむくみがあり、まん丸く、目がどこにあるのか。汚れたお月さんのような顔だ」と『チョゴリザ登頂』に書いている。このむくみの原因を心臓の機能異常かも知れないと考え心電図を撮ることを計画した。心電計は電気で動く、そのころは便利なホンダの発電機などなかった。平井は電気専攻である。作れるかと相談したら作ってみようと言う。彼は単車のエンジンを使い苦労して作りあげた。しっかりした外框で重量は40kgになった。クーリーの担ぐ重量は30kgの規定だった。一人の頑健なクーリーが担いでくれた。もちろんチップははずんだ。

3300mのゴマでは発電機は順調に動き全隊員の心電図が撮れた。登山が終わって5200mのBCで撮った。発電機を始動するとブルブルスカスカと止ってしまう。故障したかと思った。林一彦さんが酸欠かも知れないと吸気口に酸素

を流した。そしたらブルブルーンと動いた。おかげで6人の心電図が撮れた。ヒマラヤの現地で撮った世界最初の心電図だった。この時のデータは、後でヤルンカン、チョモランマで多人数撮って調べて分った高所での心電図の変化と一致していた。もう心電計は電池駆動で軽く発電機は不要になっている。

平井がどんな方面の電気の専門家だったかみなほとんど知らない。私が知っているのは、この発電機を作ってくれたことだけである。

娘誕生秘話

平井は結婚してからなかなか子供ができなかった。夫人は産婦人科で調べたが不妊の原因はなかった。不妊の原因の3分の1は男性にある。平井は京大泌尿器科に行き検査を受けた。精子の運動不活発だろうと診断された。医師は治療に積極的な指示をしなかった。平井は不満だった。

1967年から2年間ドイツに留学した。ドイツの医師に相談してみた。医師はヒマラヤのような酸素の少ない超高所に長くいるとそのようなことが起り易いといった。これは平井が娘にそう言っていたらしい。治療を受けた。効果あって夫人は妊娠。日本に帰って1970年6月無事娘が生まれた。出産はそのころ私がいた西京都病院だった。ドイツ語の6月ユニにちなんで由仁子と名付けた。由仁子さんは成長し結婚し廣瀬となり平井の葬儀の喪主をつとめた。

一時ヒマラヤの高所で登山をしたら子供ができないという説がAACKで噂になっていた。発源のものは平井かも知れない。日本でもヒマラヤ帰りの者の精子の検査をした医師がいた。報告は異常なしだったと記憶している。超高所に行ったから生殖能力が低下することはない。

平井は一人の娘と2人の孫に遺伝子を伝え旅立ったのである。

ポコさんの思い出

青野敏幸

学生時代、平井ポコさんと二人で双六谷を歩きました。その最初の晩、とある民家の前にいました。彼は、手書きの名刺を差し出し、「今晚泊めてもらえませんか・・・」と頼みこんだのです。親切にも、泊めていただきました。

そこは、双六小屋主の麓の家でした。

人見知りしない、人懐っこい、ポコさんでした。これが、彼の、まさにルーツと思います。

98年のチョゴリザ40周年記念トレッキングでは、彼は隊長として男女15人の熟年メンバーからなる隊を率いて、曾遊の地バルトロ氷河を歩きました。ガイドのアリ・ムラッドと毎日ウルドゥ語をまじえた会話を楽しみ、最奥の村アスコレでは、元高所ポーターとして雇った村人の家を訪れました。こうしたときにはウルドゥ語で会話をしていました。また、橋守をしていた男は別の元高所ポーターで、ごく自然に世間話をしていました。

また、ウルドカスの大きな岩の側面に40年前イタリア隊のマライーニが「チョゴリザ山道」と日本語で落書きしたものが残っているはずだと確信していました。実際にはそれは跡かたなく消えていたのです。

ポコさんは神戸大学に移ってからドイツの大学に2年間留学したことがあり、また学会などで外国に出かけたときなどに、積極的にその町にいるヨーロッパやアメリカのヒマラヤ登山家たちを訪問して談話を楽しんだようです。チョゴリザに登った時、前の年にこの山に挑戦し遭難したオーストリア登山者ヘルマン・ブル隊の残したテントを発見したことがあったのですが、後年生き残りのもう一人の隊員とともにドイツのある町に住んでいたブル未亡人を訪ねた話なども聞いたことがあります。

ご冥福を祈ります。

発信しつづけた平井ポコさん

上田 豊

1. ポコさんの発信力

平井一正（愛称ポコ）さんとわたしは、一回り違いの羊年の生まれだ。山へいっしょに行ったことはなく、会合や宴席でお会いする程度の付き合いだった。それでも深く心に残る方であるのは、チョゴリザ初登頂とその愛すべき人柄の上に、発信力が強かったからだと思う。

AACK の時報やニュースレターで編集に励まれると共に、多くの寄稿をされている。その数はおそらく歴代会員の中で最多ではないか。自費出版も含めて著書も多い。また会合では、はっきりと意見を表明され、いくつかの発言は、わたしの記憶に今でも残っている。

さらに、偶然ネット上で見つけたのだが、人知れず K.H. (1931 年生) の名で『山・旅・人』と題するブログを、2005 年から展開しておられた。ご自身の出版物と重なる所も多いが、総数は 99 篇におよぶ。その「はじめに」では、ご自身を「体は細いが粘りはあると自負している」と書いておられる。

<https://blog.goo.ne.jp/chogolisa/>

2. 印象に残る発言

ポコさんの記憶で最初に印象に残っているのは、京大山岳部隊による 1964 年の初登頂とその後のワンダリングの記録『ガネッシュの蒼い氷』が出た時だった。この本のわたしの登頂記をほめてくれたのだ。大変うれしかった。1973 年のヤルン・カン隊では、国内での準備中、登攀計画の検討会で色々とお話をいただいた。

ヤルン・カンの登攀ルートは、樋口・松田が 1967 年に偵察した登路をとることに決まっていた。だがポコさんは、イギリス隊が 1955 年にカンチェンジュンガ主峰に初登頂したルートを途中までたどる方が登頂の可能性が高いと、議論を再燃させた。しかし隊の方針は変わらず、わたしも樋口・松田ルートを支持した。イギリス隊ルートは、危険なアイス・フォールを延々と登るもので、その先も簡単ではなさそうだった。

後年、ポコさんはご自身のブログで「痛恨の若者の死」と題し、次のように書いている。

「たしかに登攀ルートはきびしく、よくルートを切り開いたと敬服に値するものであった。しかし結果論だが、それが登りにも下りにも時間をとり、松田の死を招いた。(中略) ヤルンカン登頂はマナスルを抜いて、我が国の初登頂記録では最高峰であり、誇るべきものであるが、ひとりの死の前にはすべて空しい。」

梅里雪山では、1991 年 1 月に 17 名の日中隊員が、大雪による雪崩で亡くなった。1996 年の隊は頂上近くまで迫りながら、大雪の可能性があると日本からの天気予報が入り、全員が一旦 BC まで下山。下部ルートが極めて危険になっており、登山続行を断念した。

その判断に対してポコさんは、翌年の AACK ニュースレター 4 号と 7 号に、批判論を寄稿した。後者の副題は「なぜサイクロンの影におびえたのか」と、手厳しい。

この隊の記録が特集された AACK 時報 13 号 (1998) には、1997 年 11 月の反省会の記録がある。そこでわたしは、サイクロンによる大雪の予報文に書かれた言葉をとり上げ、現地が慎重に判断したのも理解できる、と発言している。

生死にかかわることの現場での判断に、そこに居ない者がどこまで踏み込めるのか？ これについてこの時、ポコさんともっと意見を交わしておけばよかったと思う。

ポコさんとわたしでは、考えが違うこともあったが、未踏を求めていく強い心は共通していた。だから明確な意見を述べるポコさんとは、どんな事でも気持よく話ができた。

3. 晩年へ

ポコさんは 2006 年、ブログに「小休止」の見出しで次のように書いた。「まことに申し訳ありませんが、家内が 11 月 13 日に旅立ってしまい、いまはブログを書くような心境でありませんので、しばらく休止させていただきます。落ち着きましたら再開します。家内の旅立ちについても書いておきたいことがたくさんあります。多分 12 月中頃には再開する予定です。」

だがこれが、ポコさんのブログの最後 99 件

目の記事となった。傘寿を迎える2010年に自費出版された『わが登山人生』で、最後の10頁を「亡き妻きよ子をしのぶ」にあてている。

2018年には、ポコさんが2004～2009年のAACKニュースレターに載せた会員の評伝をまとめ、小冊子『AACK人物抄』を発行した。2005年掲載の伊藤愿さん(1908～1956)の記事を書く際、ポコさんは資料を精査するだけでなく、房子夫人にも会って取材。伊藤さんのご息女・松方恭子さんと共に、民博で梅棹忠夫さんにも会って話を聞いている。

愛妻家の伊藤愿さんが、スイス・アルプスの6ヵ月の旅行中に送った手紙などを松方さんが編集され、『妻におくった九十九枚の絵葉書』として2008年に刊行された。その出版記念会が東京で開かれ、この本に協力されたポコさんと共に、わたしも伊藤さんの遺影をヤルン・カン頂上に埋めてきた縁で招かれた。

会場ではポコさんと隣どうしの席でゆっくりと話ができ、心に残るひとときになった。奥様を亡くされての生活をたずねると、娘が良くしてくれて助かっていると、ほほえみながら語ってくれた。子供にめぐまれず悩んでおられたことを知っていたわたしは、本当に良かったと心から思った。

このたびの訃報を知った松方さんが、出版記念会で録音された全スピーチのCDを送ってくださった。その中にポコさんの懐かしい声が、鮮明に残されていた。8分余りの話の中で、伊藤愿さんのことや松方さんの本が出版に至った運命的な経緯が、いきいきと語られている。

4. 初登頂と共に

2011年暮れに、わたしはその4半世紀前の南極越冬旅行記『未踏の南極ドームを探る』を出版にこぎつけた。ポコさんに送るとすぐに、「すばらしい本です！」と題したメールをいただいた。拙著を一気に半分ほど読んでのメールで、「極寒での生活や研究、チームワークなど



1964年7月25日 ガネッシュ先登隊を神戸港で見送る平井さん(右から3人目)と樋口隊長(その左) 共に京大山岳部入部は1950年

を知って、自分が経験してきたヒマラヤなどチョロいものという気がします」とあった。

しかし、南極観測は親方日の丸のレールの上でされていること。それに比べてポコさんは、ホームだった京都を離れてからも、神戸で自力で3つの隊を次々と立上げ、初登頂の成功を重ねた。その上71才になってもなお、未踏峰に向かっている。そうして全ての登山を無事に運んできた。その意志の強さ・高さには、ただ敬服するばかりだ。

システム制御工学の研究・教育を本業とする一方で、ポコさんはAACKと神戸大学で合わせて五つもの、全てが初登頂を果たした隊で貢献された稀有な人だ。それも、最前線の登頂隊員や支援隊員だった若い頃の経験を、40-50才代に隊長やオーガナイザーとなって後輩に伝えてきた。その人生には、深い奥行きがある。

2019年6月、チョゴリザとサルトロ・カンリ登山をポコさんと共にされた高村デルファさんが亡くなられた。その告別式でポコさんは、送別のスピーチをされた。ご自身の人柄から生まれた、心にしみるお話だった。これが、ポコさんに出合った最後となった。

平井ポコさんとの接点

安仁屋政武

平井ポコさんとは学年が14年ぐらい離れているので、いわゆる山行を共にしたことはない。が、山をたまたま一緒にした記憶が2回ある。最初は1963年12月、一回生の冬合宿笹ヶ峰である。この時、指導役の3・4回生に加えて大勢のOBが参加したが（総勢30名近かったように思う）、印象に残っているのはポコさんである。

この時の合宿では雪洞による一泊山行の訓練が行われた。訓練指導はOBのポコさんと吉野コッペさんが担当し、メンバーとして浅野パンネと私こと安仁屋アンネが参加した。しかし行った場所は記憶にないし、雪洞を掘って泊まったこと以外具体的に何をしたかも全く覚えていない（因みに報告12号を見たら平井以下4名で天狗原山とあった）。パンネは交通事故で逝ってしまい、今は具体的に何をしたか知る術がない。コッペさんは健在だが、このような上級生にとっては特別ではない行動のことは多分覚えていないと思う。パンネも私も雪洞で泊まるのは初めての経験だったので、多分淡々と行動し作業したのだと思う。というのは、雪洞の中で落ち着いた頃、多分コッペさんからだと思ふけれど、“おまえ等ただ黙々とついてきて、ああしたいとかこうしたいとかうるさいことを言わないな”というような趣旨のことを言われた記憶が残っているからである。ポコさんがチョゴリザの初登頂者だと聞いてはいたが、この時はその技術に直接接する機会は無かった。

2回目は私が4回生だった1967年の3月である。この年の3月日高の春山で滑落事故が2件あったが、そのうち一件は滑落者が行方不明となった。4回生の秋から文学部で大学院を目指していた私は卒論研究に力を入れていた上に、2月の院試に備えて受験勉強もしていた。それで、4回生の冬山と春山はパスせざるを得なかった。遭難の報は大学院の入学が決まってほっとして京都でブラブラしていた時に入り、私は第一次捜索隊の一員として日高に入った。その時、ポコさんも参加した。なぜポコさんを覚えているかという、ペテガリのカリカリの

大斜面で彼の登攀技術の素晴らしさを目の当たりにしたからである。私は前年の春山で同じ斜面を登っていたが、その時の雪のコンディションは良くなんなく登れた記憶があった。しかし、捜索に行った時の斜面は全く異なり、カリカリで滑ったら止めるのは困難で一気に数百m落ちるような状態だったので、かなり緊張して登ったのを覚えている。その時、そのような斜面でポコさんがいとも簡単に軽快に動き回っていたのである。それを見て、さすがチョゴリザを登った人の技術は違うな、と感心したのである。これがポコさんの強烈な印象として今でも残っている。その後、残念ながら山をご一緒する機会は無かった。

たまたまポコさんが頭に浮かんだことがある。確か2回目のパタゴニア氷河調査の時1985年11月だと記憶している。この時、チリ側協力者のサンティアゴにある家を訪れた。彼の両親はイタリアからの移民で、父親は若い頃アルプスを登っていたクライマーなのでイタリア人登山仲間を多く知っていた。それで彼らがチリ・アンデスを登りに来た時面倒を見ているとのことだった。私が訪れた時、たまたまワルター・ボナッティ (Walter Bonatti) が滞在していた。AACKの古参会員で彼の名前を知らない人はいないだろう。エッ、あのボナッティ！！と言う驚きであった。彼は小柄で物静かな物腰の柔らかい人懐っこい感じの人だったので、印象は意外と華奢に見えるクライマーだな、というものであった。アルプスでの数々の初登攀で名を馳せ、K2を初登頂した猛者というイメージからは全く逆であった。その時の彼の雰囲気はポコさんに似ているな、と思ったのを覚えている。

もう8年以上前になると思うが、ポコさんが勤務し部長を務めていた神戸大学山岳会を通じて、間接的にポコさんとの接点があった。それはパタゴニアの氷河研究を通してである。同山岳会の会員豊田寿夫さんから、北パタゴニア氷原に関する情報を求められた。彼は1960年の神戸大学山岳会のチリ・アンデス登山隊のメン

バーであった。実を言うと、1958年の高木正孝の北パタゴニア氷原の第2の高峰セロ・アレナレス (Cerro Arenales, 3365m) の遠征のことは知っていたが、1960年の活動のことは彼に聞くまで知らなかった。

豊田さんは、北パタゴニア氷原を初めて横断したエリック・シプトン (Eric Shipton、ヒマラヤで特に有名だが、パタゴニア氷原でも活躍した Land of Tempest 邦訳『嵐の大地』) の詳しいルートを同定したいということで、最新の地形図や空撮写真を持っている私に連絡してきた。いろいろとやりとりする中で、1960年のアンデス遠征 (首都サンティアゴの東側5~6km級の山) の時、豊田さんが一緒に登攀活動をしたチリ側の若手の一人にホルヘ・キンテーロス (Jorge Quinteros) がいることが分かった。その後、2004年にサンティアゴ

の本屋で買ったが積ん読していた Historia Del Andinismo En Chile (1989年、Gastón San Ramón Herbage 著) を詳しく読んで仔細を確認した。なぜホルヘかというと、彼は私が初めて参加した1983年の北パタゴニア氷原調査にチリ側のロジスティクス協力隊員として参加していたからである (その後も何回か参加した)。彼は英語を話さないのでも1960年の日本人との登山活動について我々に特に話さなかったと思う (記憶がない)。因みに彼は現在のチリの登山界の育ての親の一人のような存在なのだそう。全く人はどこでどのように繋がっているか判らないものである。このようなことから、神戸大学山岳会を率いて数々の海外遠征を成功させたポコさんの存在が身近に感じられるようになった。

平井一正 (ポコ) さんへ

井上 潤

私 (トッキュウ) が60歳を超え、長期の休暇をとれるようになるとすぐ、平井ポコさんは私をバルトロ氷河トレッキングにさそってくれました。それは、私にとってカラコルムヒマラヤの荒々しくも美しい高峰たちを見る最初の機会となり、その後もいろいろな山行に誘ってくれてありがとう。

ポコさんが京都、金沢、神戸と仕事の居を変

えても、途切れずに友人として交流できたことをありがたく思います。よき友は人生の宝。君の笑顔、ユーモア、70年の友情ありがとう。安らかにゆっくりとお眠りください。

合掌



写真1 1998年8月バルトロ氷河にて 後列左から3人が平井さん 日本山岳会京都支部 (当時)・朝倉英子さん撮影



写真2 1998年8月バルトロ氷河上のキャンプにて 左から平井一正 井上 潤 酒井敏明 新井 浩さん撮影

ゴローのポコ追悼文

岩坪五郎

2019年6月4日高村デルファ（1934年生、1953年京大山岳部入部）はガンで亡くなった。葬儀の直前、岩坪ゴロー（1933年生、1954年京大山岳部入部）は佳子夫人からちょっとお話をしてほしいと言われた。それは弔辞を述べることであったが、突然のことで思いつくままに、デルファとゴローの関係を述べた。ともになんとか京大名誉教授になれたこと、ともにサルトロ・カンリとノシャックのヒマラヤ初登頂に成功できたこと、1969年ともに機動隊に逮捕され、2泊3日の留置所暮らしをしたことであった。そのあと安津子令嬢の希望で、泥酔したデルファのローンサムヨーデラーの録音を大音響で流し、全会場の熱狂と拍手を呼び起こした。

ただちにデルファの追悼文集の編集が始まった。委員長は平井一正（ポコ、1931年生、1950年京大山岳部入部）、酒井オシメ（1932年生、1952年京大山岳部入部）、ゴローであった。発行は同年11月末。委員長のポコはなかなかの凝り性で、オシメ・ゴローはすっかり疲れてしまった。

ポコさんの追悼文なのにデルファのことを書きすぎている。ポコ・デルファ・ゴローの3人は、1958年チョゴリザ隊・62年サルトロ・カンリ隊と一緒に参加している。口には出さないけれど、3人には死なばもろともといった気分があって、ついつい、ポコのこととデルファのことが混乱してしまう。

デルファ死亡から2年近くたって、先輩で医学部の斎藤Yさん（1929年生、1949年京大山岳部入部）から電話があった。ポコが難儀な病気で入院している。いつまでもつか不明。担当の医師は信頼できる人、コロナ問題で面会できない、とのことであった。その予想通り、病気はすすみ、2月17日通夜、18日葬儀となった。通夜に出たら、亡くなられたきよ子夫人に感じの似た着物喪服の女性が喪主の席に座っていた。娘さんの廣瀬由仁子さんらしい。翌日の告別式の直前、その喪主がYさんと私に弔辞をお願いしますといった。これはデルファの場合と同じだと了解し、ご導師の読経の間、なに

をしゃべるか考えた。Yさんは医師として、病氣の話を詳しく話し、皆、神妙に聞き入っていた。

私はポコとゴローの関係から語り始めた。学年は4年差があるが、ゴローは2浪なので年齢は2年しか変わらない。俺は最難関といわれる工学部の電気にストレートで合格したが、ゴローは2浪して農学部の林学やとポコは威張る。ゴローは反論する。電気のくせして携帯ラジオの修繕もまったくできないのはなんでや？

それは弱電の問題や、俺は強電やとポコは威張る。それでは強電の問題です。夜、みな寝てしめて工場も止まり電気もいらんようになる、そのとき余った電気はどこにいくのや、電柱に黒い鉄の箱がある、あれにたまるのか？ そうではないと思う、というだけでポコさんは答えられない。そんなこともわからんのか。昼間、ダムから落ちてきた奔流は、重い重い水力発電機を回して、緩やかな流れになって下に落ちる。電気のつかわれない夜、水力発電機は軽やかに回転し、水は猛スピードのまま、下のセメントにぶつかる、そうでしょう、ポコさん。この人はそれを肯定も否定もできない。運動能力もひどい。野球をさせたら、ピッチャーからキャッチャーまで、ボールを投げるのに2バウンドかかる。

しかし優れたところもある。恐ろしい岩壁をまるでトカゲか、ヤモリのように登っていく。私はもう登山靴のかかところが震えて登れない。運動能力だけではない。ルート・ファインディングも不思議な能力を持っている。ヤルンカン隊は、BCから頂上まで直登ルートをとったが、ポコさんは、できるだけ上まで英国カンチェンジュンガ隊のルートをとるべきだ、そのほうがやさしい、と主張した。そうしていたら、松田ランプは登頂後も元気だったかもしれない。

一方、カラコラムの登山で高所人夫に25キロずつのメリケン粉を配るのに、私は20キロほど入れて後、少しずつ加えて25キロにし、ポコさんは30キロから少しずつ減らして、25キロにした。ずるがしこい高所人夫の一人は私

を見てにたりと笑った。ポコさんには、ちょっとした気配りといったものが欠けていた。その辺の事情が一切わからない性質であった。

弔辞だからもっとも故人をほめたたえねばならないのだが、あまりに親しかったからか、悪口ばかりが出てくる。式後、火葬場にお骨拾いに行き、私以外は皆親族の人たちだったが、故人はどうしてあれほどケチだったのだろう、自分はエエシのボンだと威張っていたけれど、と私は云い、皆さんの同意を得て、会話がはずんだ。

しかし、神戸大学でポコさんは、よく頑張った。1964年赴任直前の62年、神戸大学南太平洋学術調査隊長として神戸大学の探検隊を率いて、南太平洋で亡くなった高木正孝さんとあらゆる面で比較されただろうから、やりにくかったにちがいない。この人はチョゴリザ隊・サルトロ・カンリ隊でわたしたちの副隊長をつとめた加藤泰安さんとの登山仲間で、第一次マナスル隊登攀隊長、東大出身の猛者であった。それにくらべ、われらがポコさんの体つきは見るからに貧弱である。チョゴリザ隊の時、精強をうたわれた藤平正夫さんとアタック隊を組んで、常にトップを進んだおそるべき強さをポコさんは自分で宣伝するわけにはいかないので、周囲から軽く見られたに違いない。私なら、適当な人物を探して、宣伝活動をやるのだが、ポコさんにはできない。当初、神戸大学山岳部関係でのポコさんの環境はきびしかっただろう。

しかし1976年には、カラコラムのシェルピカンリ(7380m)の初登頂をめざす神戸大学隊の隊長となり、独力で募金を行い、初登頂に成功した。1980年、神戸大学訪中団に参加して、中国登山協会史占春主席と親しくなり、1986年クーラカンリ(7554m)の初登頂に成功している。88年には神戸大学と武漢地質大学の合同登山隊を組織し、総隊長を務める。2003年には東チベットの秘峰ルオニィ(6805m)の登山を目指したが、悪天候で撤退を余儀なくされた。

天安門事件以後、何でもかんでも日中友好の雰囲気はなくなってきたが、ついに一度も遭難事故を起こさなかったことは彼の大きな誇りであり、自慢である。確かにそれは偉大で稀有なことである。私は2度引責辞職している。

神戸大学工学部でも活躍して、研究科長を務め、2010年には叙勲を受けている。2011年、日本山岳会名誉会員に推挙された。京大学士山岳会関係では、松方三郎、今西錦司、西堀栄三郎、今西寿雄、藤平正夫、斎藤惇生が会長職を務めたことにより推挙されている。それ以外の加藤泰安、梅棹忠夫、川喜田二郎、平井一正の4名は広く登山・探検に対する業績を評価されたものである。

2019年には、神戸大学、甲南大学の人たちに盛大な米寿の祝賀会をしてもらっている。これは愛情によるものである。ポコさんは喜び、満足しているに違いない。

合掌。

ポコさん

岩坪吟子

1962年に私は岩坪五郎と結婚した。四手井アンギラスご夫妻が仲人で、四手井夫人は式の直前にボトルに入れた日本酒をがぶりと飲まれたという。私たちは神前ならぬ人前結婚式を挙げた。二人で宣誓文を読みあげ、人類の平和と発展に貢献すると言ったようである。

その後の宴会の司会は斎藤Y先生、平井ポコさん、高村デルファーさんの3人であったが、五郎からの注文が多く、お前が自分で司会と花婿の両方の役をやったらええやんけーとポコさんからいわれ、それは忙しすぎる、勘弁してく

ださいとお願いしたとか。

以来、59年間のお付き合いとなった。ポコさんは私が京大病院の助手時代からの患者さんであった。当時、ポコさんは歯周病をわずらっていて、私は当時の治療方針ののっとして、歯肉をメスですばーっと切除した。

普通、治療される人は、みな目をつぶるのに、ポコさんはぽっかり眼をあけて私を見つめている。私の手でポコさんの顔を隠しても、指の間から私を見つめていて、あのつぶらな目が気になって仕方がない。

その後、私は京都第一日赤に勤務。また、深草で開業した後も、ずっと治療に通ってくださった。その成果なのか、なんと28本中欠損歯は1本のみで、あとは見事に歯周病も治癒し、義歯なしですごしてこられた。ポコさんは、私の書いた文章が面白いと、待合室においてある『ヒマラヤ診療所日記』や他の出版物を繰り返し、繰り返し読んでくださった。

近く、私は旅行記を出版予定であるが、それに間に合わず亡くなられたのは残念である。

我が家には子供がいないので、ポコ、オシメ、デルファーの先輩たちは、我が家の常連客であった。デルファーの追悼文の編集も我が家でやったが、それがやっとすんだところでしょう。早すぎますよね。ポコさん。

合掌

平井先輩は伝説のクライマー

沖津文雄

平井一正氏は1950年に山岳部に入部されており、わたくしより5年先輩です。残念ながらわたくしは山に同行させていただく機会には恵まれなかったように思います。ご専門は電気工学、わたくしとは研究対象も教室の場所も大きく異なっていました。お会いできたのは山岳部やAACKの会合の席でのみ、先輩は町付合いの山仲間でした。

わたくしには先輩について語れることはあまりありませんが、先輩を有名にしたのはチョゴリザ初登頂のサミッターとしてのご活躍です。頂上へのルートは右側に雪庇が発達し鋭く落ちた絶壁、左側は氷結した急斜面の氷壁でしたが、先輩はザイルのトップを務め、この困難なルートを躊躇せずに登りつづけられました。先行するルートをつねにオブチスティックに見積もられていたらしいのは、性格なのでしょう、あるいはご自分を鼓舞しておられたのか。

先輩のすぐれたバランス感覚はチョゴリザ隊長の桑原武夫氏も認められており、バルトロ氷河のリリゴーキャンプでポーターも含めたボルダリングで先輩が「基本体勢をくずさず」トラバースできたことを高く評価しています(桑原武夫：『チョゴリザ登頂』文藝春秋新社、



桑原武夫氏卒寿のお祝い会にて 右から桑原武夫氏
平井一正氏 林一彦氏

1959)。

すぐれたバランス感覚は日本の雪山でも生かされており。先輩は深雪の中をあたかも泳ぐようにすいすいと進んで行くことができたようです。体のでかい脇坂ザッカス氏などにはそれでは除雪が不十分らしく、「あれではラッセルにならない」とザッカス氏は嘆いていました。

いつも微笑みを絶やされなかったお姿が今も心に浮かびます。ご冥福をお祈りします。

合掌

希有なる岳人 ポコさんを偲ぶ

木村雅昭

私が山岳部に入れていただいた1961年は今にして想えば、京大山岳部ならびに学士山岳会の黄金時代であった。当時ルームではヒマラヤ帰りの先輩に頻繁にお目にかかったが、そのいずれの人も心身共に山男といった雰囲気を漂わせておられ、初心者には近づき難い存在であったが、その中でひときわ華奢な体つきの先輩がおられた。初めてお目にかかったとき、こうした人でも山に登れるのかと、身体に自信がなかった私には励みになったが、この方がチョゴリザのサミッター、平井一正（ポコ）さんであるとうかがって驚いた。

この当時我々初心者の中で、ヒマラヤでは瘦せ型で肺活量の大きくない者が強いとの見解がまことしやかに流されていたが、これはチョゴリザでのポコさんのめざましい活躍を念頭においてのことである。頂上アタック隊にポコさんがえらばれた際、同行の藤平さんの体調がよくなかったこともあって、ポコさんは、最終キャンプから頂上まで、胸までのラッセルを含めて、

その大半を一人でルートをきりひらかれたが、これは想像を絶する偉業である。後にこの日のことをポコさんに尋ねたとき、「不思議にこの時、足が前に出た、自分はこの日のために生まれてきたようなものだ」との答えが返ってきた。

その後ポコさんはサルトロ・カンリの遠征隊に参加され、そして京大から神戸大学教授に移籍された後、今度は隊長として神戸大学の若手の岳人を引き連れてシェルピカンリ（7380m）やクーラカンリ（7554m）の初登頂に一人の犠牲者を出すこともなく成功されることとなったのである。

こうしたポコさんの山行は、その著『初登頂—花嫁の峰から天帝の峰へ』、ナカニシヤ出版平成八年、に達意の文章で詳細に綴られている。その一方で、本業の電気工学でもポコさんは、フンボルト大学の資金援助でドイツに留学される等、顕著な業績を挙げられることとなったのである。

二足のわらじを記した文人

斎藤清明

平井一正さんの訃報（毎日新聞2月16日朝刊）の肩書は、「登山家、神戸大名譽教授、システム制御工学専攻」でした。まず登山、そして教授と続いています（この訃報、榊原ルンペが連絡したそうです）。

きっと、ポコさんは微笑んでいることでしょう。「ヒマラヤと研究・教育は二足のわらじ。どちらもおろそかにできない。必死でがんばった」と言っていたのですから。

葬儀場に掲げられた、チョゴリザ頂上の雄姿はじめ、サルトロ・カンリやシェルピカンリ、クーラカンリなど初登頂した高峰の写真パネル。入口に置かれた、褒章の際の記念写真や研究業績集、教科書や山関係の著作類。これらは、生前に自ら準備されていたと、娘婿の廣瀬さん



告別式ホールの場景 および 展示物

に聞きました。「家からここに運んできて、並べただけです」と。お通夜での「放浪の歌」合唱も、ポコさんの指示でしょう。

この几帳面さは、『回想の60年—わが山と人』

(1991) や『ひつじの足跡』(1995)、『わが登山人生』(2010)の冊子(いずれも土倉事務所で自費出版)にもうかがえます。ていねいな文章に加えて、履歴書や研究業績、海外渡航記録、そして山行記録と、じつに詳細です。そして、ヒマラヤ登山の記録をまとめた『初登頂』(1996 ナカニシヤ出版)も。これらによって、ポコさんの人生がよくわかります。

自らの人生をきちんと記録して残すという、できそうでなかなかできない作業を、飄々となされてきたことに、脱帽です。そして、あらためて読みかえました。

そのなかで、山の仲間について文章が印象的です。とくに、先に逝った脇坂さん、山口さん、林さん、藤平さんなどへの追悼文が。

チョゴリザ頂上で「ブライド・ピークだからだよ」とさとした藤平さんも『今は風に語らしめよ』(1986)を残されましたが、お二人の文章の描写が微妙にちがいます。ここでも几帳面さが出ていて、それぞれの個性に興味深いものがあります。ポコさんは「あんな格好いい本のタイトルはようつけられへん」といってました

が、『初登頂』はそのものズバリじゃないですか。

そうそう、藤平さんが頂上に埋めた人形を28年後にスペイン隊が発見して持ち帰った話、ポコさんから教えられ、私が記事にしましたね。

最後の著作になった『AACK 人物抄』(2018)は、このニューズレターの連載をまとめられたものですが、読みごたえがあります。AACKのなかでも今となってはあまり知られていない人、縁の下の貢献者を取り上げた、ポコさんの配慮はさすがです。

遺族や関係者に取材するなど、よく調べられています。伊藤洋平さんの娘さん、田中喜左衛門さんの孫の話を書く際には、私にも声をかけていただき、ありがとうございました。

梅棹さんの妹、田中ふき子さんを、居谷千春さんと3人で丹波へ訪ねたのは、もう3年前のことです。その際も丹念にメモを取っていましたが、その原稿はまだ拝見してません。そのほかにも書いたものがパソコンに残されているのではないかと、気になるところです。

登山家平井一正は、文人でもあったと私には思えるのです。

山に生きた平井一正先輩

酒井敏明

I

平井一正さんは1950年4月京都大学に入学し、大学生になったからには登山でもはじめてみたいと思って山岳部に入ったという。初心者としてのスタートであったがたちまちにして山登りの魅力のとりことなり、岩登り、沢歩き、雪渓歩き、積雪期のスキーなど、多様な登山活動の各分野においてもみずから研究努力し先輩からの指導にもよくこたえて、急速に技量をあげた。平井さんにはポコというあだ名ができ、自称、他称ともにポコがひろくもちいられたので、本稿においてもそれにしたがっておきたい。

ポコさんをはじめ同年の入部者には優秀な部員が大勢いて、創部数年にして京大山岳部が上昇期に入ろうとしたころであった。2年後輩の私が山岳部の生活をはじめることになったのは、幸いこの時期にあたっていた。最上級生の4回生チーフリーダー藤田陸奥麿さんは旧制六

高出身だったのはその一例であり、4回生とそれより年上のOB諸兄は旧制高等学校出身者・退学者であり、OBには三高や富山高校出身者などがいた。ポコさんの1年上が新制大学第一期生だったと思うが、入部当時の上級生部員たちおよびこれに近いOBたちの多くとは、夏冬の合宿をはじめ年間を通じていっしょに山に登る機会がたびたびあり、後輩に裨益すること多大であった。ポコさんは年も近く偉ぶところがなく、常に笑みをたたえている風の雰囲気を持たせよわせていたので、私にとっては、山へ入る前の準備はもとより山での行動から考え方にいたるまで、万般にわたりお尋ねしたり指導を受けたりすることができる先輩であった。

当時は8000mクラス的高峰があいついで登頂されたヒマラヤ黄金時代の開幕早々の時期にあたり、大学山岳部でもヒマラヤへの熱が大きな高まりを見せていた。私たち1回生部員たち

が妙高高原笹ヶ峰の京大ヒュッテに合宿してスキー練習にとりくんでいた52年12月から翌年正月にかけての期間中、ポコさんらをふくむ上級生部員10余人は遠路北海道の知床半島に“遠征”し、半島先端から知床岳までの厳冬期未踏の稜線初縦走を目標として苦闘をしている最中なのだという上級生部員たちの話を、薄暗い石油ランプのもとパチパチはぜる薪ストーブを囲んだ私たちが胸おどらせながら聞きいったことは、今でも鮮明に覚えている。

2回生になった53年初夏には日本山岳会がマナスル8165mに第1次登山隊を派遣し、イギリス隊は最高峰エヴェレスト初登頂に成功した。同年ポストモンスーン季に京大士山岳会が今西壽雄さんを隊長とするアンナプルナ登山隊を派遣した。同隊はアンナプルナⅡ峰を南側から偵察した後、北面に転進してⅣ峰登頂をめざしたのだが、最終キャンプのテントをジェットストリームの強風に破られて無念の撤退を強いられる結末だった。京大山岳部は第2次大戦直後の1946年に創建された歴史のあさい山岳部であったが、同隊員に選ばれた若いOB二人がネパール遠征での経験をルームに持ち帰ってきたばかりのころで、現役部員たちはヒマラヤをごく身近なものとして意識し、いつかは自分たちもヒマラヤに行く夢をかなえたいと、日々の体力トレーニングや近場の山行などにも精進を続けていた。

私自身、とくに濃密な時間をポコ先輩とともにした積雪期の山行を挙げるとすれば、鹿島槍ヶ岳東尾根で連日の豪雪になやまされて3週間ほどテントと雪洞に閉じ込められたとき(1954年暮れ～翌正月)と、毛勝山から剣岳頂上を目指した極地法形式の春山合宿の1ヶ月(55年3月)がまず筆頭であった。ポコさんは京都府立桃山高校を卒業して1950年4月に京大工学部に入學し、4年後卒業して大学院工学研究科修士課程にすすみ、修了後金沢大学工学部助手に採用されたという経歴なので、山岳部で登山をしたのは6年間だった。学部卒業の年3月～4月の春山にポコさんは、烏帽子岳から三俣蓮華岳、黒部五郎岳、薬師岳、立山の各山頂を踏破して剣岳に至る長距離の縦走を、現役部員2人を率いて無補給・無支援で達成するユニークな登山をして注目を浴びた。背は小柄決して強壮とみられることはない体格の持ち主ポ

コ先輩であるが、装備や食料など質量ともに充分こまかく検討して万全の準備をかさねた、模範的な上質の登山をなしとげたことに敬意を惜しかなかった。

Ⅱ

現役部員時代の4年間にはじまった私とポコさんとのお付き合いはその後断続的には60年を優に超える長期にわたるけれども、神戸大学に赴任されたのちの約30年間は神戸大学山岳会の皆さんとの活動が中心になったのは当然なことである。さいわい、ポコさんは自ら書くことを苦にしないお人柄で、現役部員だったころ山岳部ルーム日誌に個々の山行記録をくわしく書き記すのは毎度のことであったし、意見表明や論評的な文も発表し、なかにはマンガに類する挿絵つきの記録もあったと思う。長じてのちには登山に限らず自分の経験やときどきの感想を書き留めた多くの文を発表されたので、学内誌や新聞に寄稿した記事をも含め、それらをまとめた私家版の著作が幾冊か作成され、私もその主なものは頂戴している。郵便でとどいたものをすぐには読まずそのまま書棚に並べて、いつしか忘れてしまった場合もあり(失礼しました)、今回はさすがにあわてて目を通した文章もまたあるのは恥ずかしく思う。

還暦をむかえた1991年11月に私家版①『回想の60年』71ページを刊行、95年に私家版②『ひつじの足跡』117ページを、さらに96年にナカニシヤ出版から③『初登頂：花嫁の峰から天帝の峰へ』358ページを公刊した。さらに定年で大学教授職から退いたのちに④『わが登山人生』231ページ、2010年を私家版として刊行した。隊長として遠征登山隊を率いたカラコルムとチベットの2回の計画はそれぞれ編集、執筆を担当して立派な報告書を世に問うたことはのちにふれるであろう。

私自身をふりかえてみても同じことなのであるが、山岳部員同士であれば、同年齢か先輩や後輩とのあいだを問わず、自分の両親をはじめ兄弟姉妹など家族内のことをおたがいに話し合うことはあまりないことであつたと思う。私もポコさんの生い立ちや、中学高校生時代のことなど、ほとんど聞いたことはなかったのであるが、上掲の著作物を読んでではじめて知ったことをもふくめ、ポコさんのこれまでの生涯のス

ケッチなどをここに紹介することは、故人追悼の特別号を作ろうと提唱した者の一人として、許されるのではないだろうか。

平井一正さんは昭和6年10月31日、父平井正一郎さんと母文子さんの長男として茨城県水戸市において誕生した。お父上は日本生命という会社に勤務され、幾度か転勤を経験し居住地が変わったことがあった。ポコさんは上掲①に「父の勤めの関係で生まれてまもなく枚方に移り住んだので、私にとっては水戸はただ単に戸籍上の地名でしかすぎず、なじみはない。(ちなみに本籍は岐阜である。)」と書いている。

「幼少時代は、病弱で家から一歩も出られないほど内気、泣き虫であった。」また「当時の枚方は今では想像もできないほど田舎で、家の裏山では狐のなきごえがしていた。」などと幼少期の思い出を書きのこしている。

ポコさんが長男であることは名前が示唆していることでもあるが、姉が一人、妹が二人、弟一人の五人きょうだいで、祖母を入れて8人くらいであったことなどは、ポコさんだけを見ていた私どもにはとても想像できないことであった。中国への侵略からまもなく第二次大戦への参戦と日本帝国政府が無謀の軍国主義体制を国民に押しつけていた時代である。戦時下に大勢の家族を養ってゆくことは重い負担であったはずであるが、「・・・食べ物の調達が大変であった。しかし母は苦情ひとつこぼさず、常に笑顔をみせ、子供たちをすなおに、すくすくと育てた。後年、当時家には金がなくて貧乏であったことを知った。父母はそんなことをおくびにもださず、高価な本をよく買ってくれた」と回想の文は記す。

敗戦直後の混乱期には「生活物資は何もなかった。わらじにゲートルで会社に行く人を見るのも不思議でなかった。食料もなく、イモのつるや豆をひいたものを食べた。イナゴをとってきて焼いて食べた。」の記述がみられるが、中国、青島からの引揚者である私の家族も食べるものが無くて食うや食わずの苦しい生活をした時期であったから、わが身にも当てはまるリアルな描写と実感する。

昭和13年枚方小学校に入学する。「・・・当時もはや日本は引きかえすことのできない戦争のみちに突入しており、軍国主義一色の教育がはじまっていた。毎朝講堂に整列させられ、

御真影と称する天皇、皇后両陛下の写真に対する拝礼のあと、校長先生の長い長い話が続いた。・・・」

ここまで読んで、後年になって、どうした機会であったか覚えがないのだが、「わしの誕生日は御名御璽の日なんやで」とのポコ先輩のことばを思い出す。昭和10年代に小学生時代を送った私たちの世代であれば、1年に数回厳粛に執行された式日の定例行事、校長先生教育勅語拝読を思い出すにちがいない。「明治23年10月30日 御名御璽」の文言は、天長節、明治節、紀元節などの各式典において毎回おこなわれた校長の勅語朗読が終わったことをしめす、魔法の響きを放つ言葉であった。ポコさんと私どもはまさに同じ世代であったことをしめす、絶好の証明であったことがわかるのである。

「昭和16年の日米開戦は、小学校4年生であった私にも大きな衝撃であった。大戦果に酔い、明日にも天皇陛下のために死のうと、幼な心に決心していたことを思い出す、今、教育のおそろしさを身にしみて感じる。小学校は国民学校と名前をかえた。弱虫だったが勉強はよくできた。6年間級長をつとめた。」

こうして小学校を卒業した平井少年は、「昭和19年、枚方のとなり光善寺にある新設の大阪市立中学校に入学、防空ずきん持参の受験であった。戦争ははげしくなり勉強どころではなくなった。・・・火薬工場に毎日のように勤労奉仕に行き、火薬で体中黄色になった。・・・」とか、配属将校が学校にいてきびしい教練があり、昭和20年8月、中学2年のとき敗戦、「価値観が一瞬にしてひっくりかえった」時代であった。

中学3年のとき、京都府立桃山中学校に転入学した。学制改革により桃山中学校は男女共学の新制府立桃山高校になり、通学区制が採用されて「それまで別の中学校、女学校に通っていた男女が同じ桃山高校に入ってきた。・・・桃山女学校や府立第一女学校などから来た美少女たちと机を並べて勉強する日々が続き、楽しかった。」

「数学と英語と国語が得意の科目で、」日本文学の古典はよく読み、「自分でも詩、小説、エッセイなどを書き、文学少年をきどっていた。自他ともに文系に進学と決めていたが、父の強い勧めで、秋頃、理系に変更した。」父は「身に

技術をつけることの大切さを力説したので」・・・京都大学工学部を志願した。「得意の数学では簡単な数値計算に失敗するなど、試験後答案のアラが目立ち、駄目かと諦めていたが、・・・合格と知らされた時は嬉しかった。」

ただ母上について書かれたところでは、当時の女学生としては珍しいと思われるが富士山に登ったことがある女流登山家、進取の気性の女性であったと述べている。自分が大学に入ってから山登りをはじめ、これにのめりこむようになってからも、母はつねにあたたかく見守ってくれたと、ポコさんは感謝している。

ここに引用したのは上掲①からである。他の著作に収載された文を読むと、ポコさんの大学における教育、研究生活の余滴といえるような覚書や随想の文に出会うのであるが、一方ではポコさんご自分の40年におよぶ登山の経歴をくわしく記述した文を数多く発表している。それ故本稿では屋上に屋を重ねることは避けて、神戸大学勤務時代およびその後神戸大山岳会会員たちと登った多彩な山行にふれる余裕はなく、ここには海外登山の主要なものを手短かに紹介する程度にとどめざるを得ない。

1) 1958年京大士山岳会カラコルム遠征登山隊（桑原武夫隊長）に参加 26歳

登攀隊長藤平正夫さんと二人で8月4日チョゴリザ峰7654mに初登頂する。これは立教大学隊によるナンダコット（1936年）、日本山岳会隊によるマナスル（1956年）の初登頂につづく第3番目の日本隊によるヒマラヤ高峰初登頂である。

2) 1962年日本パキスタン合同カラコルム登山隊（四手井綱彦隊長）に参加 31歳

サルトロ・カンリ峰7742m初登頂をサポートする。同峰は中国およびインドとの国境線近くに位置するため、パキスタン国山岳会との合同隊を編成してやっと許可を取得、成立した隊である。京大士山岳会の斎藤惇生、高村泰雄とパキスタン人バシルが初登頂するのを支援した。

3) 1976年神戸大学山岳会カラコルム登山隊長としてシェルピカンリ7380m登山を指揮し、同峰初登頂を成功させる。44歳

平井一正編『コンダスの女王 シェルピカンリ』330ページ 神戸新聞出版センター 1978を公刊する。

4) 1986年神戸大学山岳会チベット学術登山隊総隊長として指揮 54歳

中国チベット自治区のクーラカンリ7554mに初登頂し、帰路成都まで川蔵公路3000kmの初踏査を成功させる。

神戸大学学術登山隊編『天帝の峰に挑む 東チベット—四川学術調査3000キロ』283ページ 神戸新聞総合出版センター 1988を公刊する。

5) 1988年神戸大学山岳会・中国地質大学合同登山隊総隊長としてこれを実現 56歳

この遠征にポコさん自身は参加しなかったが、四川省の未踏地域に登山対象チェルー山6168mを発見、計画実現にこぎつけた。日中各7人のおもに学生からなる隊員14人が2回の登高で未踏の山頂に立ち、大いに合同登山の実を上げることができた。

6) 2003年東チベットの秘峰ルオニイ6805mの登山許可を取得、神戸大学山岳会登山隊を派遣

71歳のポコさんも参加したが、悪天候に阻まれて撤退を強いられる結果であった。

ここに略記した海外登山行においても平井さんがほとんどの場合好成绩をあげられたことは明白で、ポコさんは運命の女神に嘉された人だったと思う向きがあるかもしれないが、それ以上に日常的にかれが大きな努力を重ねていた結果のあらわれであったことを強調しなければならない。桂にある自宅から勤務先までは阪急電車を乗り継いで通勤する片道2時間ちかくをラジオ放送の語学講座の聴取にあてたのはその一例であろう。中国登山協会の史占春主席と深い信頼をきずきあげたポコさんだったが、これは中国語会話を駆使するレベルにまで熟達して初めて可能になったことにちがいない。

Ⅲ

最後になったが、平井さんの主要な経歴を紹介し、学会活動や大学行政へのかかわりについても簡略ながら触れ、晩年の健康や療養について

て最低限の説明を加えることによって、責めを果たしたいと思う。

平井一正さんの略歴

1931年10月31日 父平井正一郎 母文子の長男として水戸市で生まれる
1950年3月 京都府立桃山高校卒業
同年4月 京都大学工学部に入学
1954年3月 京大工学部電気工学科卒業
同年4月 京都大学大学院工学研究科修士課程に入学
1956年3月 同上 修士課程修了
1956年4月 金沢大学工学部電気工学科助手に就任
1960年6月19日 小野田きよ子と結婚
1961年4月 京大工学部電気工学科助手に就任
1962年 京都大学工業教員養成所助教授に就任
1963年 工学博士（京大）
1964年 神戸大学工学部計測工学科助教授に就任
1972年 同上 システム工学科教授に就任
1995年 同上 退官 名誉教授
1995年 甲南大学理学部応用数学科教授に就任
2000年 同上 定年退職
2010年5月 瑞宝中綬章を授与される

所属学会など

システム制御情報学会、計測自動制御学会などで名誉会員、副会長などを務める

神戸大学では、国際交流センター長、神戸大学評議員、神戸大学自然科学研究科長などの役職に就く。1992～93年にジョモケニヤッタ大学で研究指導する。

晩年の健康状態

ポコさんは山で大きな事故を起こしたことは皆無であったと思うし、自身が直接関係した海外遠征計画においても、毎回立派な成績をおさめていた。チョゴリザでは高所順応に成功し、再度の頂上攻撃でも抜群の力量を発揮し、初登頂成功を勝ち得たといえるだろう。神戸大学山

岳会遠征隊を率いた2度の挑戦でも両度とも初登頂を成功させ、しかも隊員に故障者を出すこともなかった。

順風満帆の人生を送っていたポコさんは還暦をむかえるころまで事故や病気とは無縁であったが、その後は多少違いがでたようである。1978年に狭心症という心臓病をやったという。かれの私家版②『ひつじの足跡』に「心臓病と関節炎」の短文があって知ったのであるが、それ以上の細部にわたる療養については私には書く資質がないことをつよく自覚しているので、ここで筆をとめるのが適当であろう。

かれ自身が妙高山の近くでスキー転落事故を起こし、直江津から京都までタクシーで帰ったことがあるという話は以前に聞いていた。同じくポコさんの私家版④『わが登山人生』Ⅷ章に「病気と事故を克服して」の節があることに気づいた。1992年に大動脈弁閉鎖不全症と椎間板ヘルニアという二つの大病をわずらったとあり、93年4月には阪急六甲駅の近くで転倒、京都市桂に帰宅してから斎藤惇生ドクターに診てもらいと肋骨が折れて胸腔に血がたまり・・・などを書いてあって、その項のタイトルは「九死に一生を得る」である。

次項「妙高山外輪山スキー事故」を読むと、1999年12月31日三田原山でスキー滑走中に転倒、骨折事故をおこした。同行者に新潟県警にヘリコプターを呼んでもらう。3時間後にヘリにつりあげられ、新井ヘリポートから救急車で上越市の新潟労災病院まで送られ、X線で脛骨3カ所、腓骨1カ所の骨折がわかる、ギプスを踵から股の付け根までまいてもらう、などの説明が続いている。直江津から京都までタクシーで帰り、高速代もいれて14万円払った・・・。「家内からはさんざん叱られたことは言うまでもない。3日から斎藤先生の病院に入院し、手術をしてもらった。」

華麗な登山歴、海外遠征歴をもつ登山者ポコさんが、晩年に上記のほかにも事故や病気で苦勞されたことはあったかも知れないが、残されたたくさん刊行文字資料からその種のことを探し出しこまごまと説明を加えることは、私の本意ではなく控えさせていただく。

おそらく最近1年が病魔にもっとも苦しめられた年月であったにちがいないと思う。ご本人は自分の体調の不全について友人たちにこまか

く語ることはしなかったし、もし友人たちが聞かされたとしても、高齢者の病とそれへの対応についてほとんど無知にちかい私どもはおよそ役に立つことは何もできないのである。このあたりについてはポコさんの2年先輩、医師の斎藤惇生さんが通夜式で病状をお話になっていたから、本誌にも一文を寄せてくださるだろうと思います。昨年末ちかく以降ポコさんが入院、受診中であると令嬢由仁子さんからのお知らせを斎藤ワイさんを通じて知らされていたが、そのころはどこの病院もお見舞い謝絶の新型コロナ禍の時節、友人や後輩たちは気づかい気をもむ

ことしかできない数十日であった。

2月15日午前2時 平井一正さん逝去
享年 89歳

つつしんでご冥福をお祈りします。

合掌

追記

2月17日19時より通夜式が御池大橋西詰めセレマかもがわホールにおいて、18日13時より告別式が同じ会場において、厳かに執りおこなわれた。喪主は廣瀬由仁子さん。

平井ポコさんとの山歩きの思い出

阪本公一

平井一正氏（ポコさん）が亡くなられ、ポコさんとご一緒に行った山行を、いろいろ思い出しています。

1950年入部のポコさんとは、10年の歳の差もありましたので、又ニューヨーク8年、南ア・ヨハネスブルグ6年と海外生活が長かった私は、南アから帰国するまでは殆んどポコさんとの接触はありませんでした。1993年に南ア駐在から帰国してから、山狂いの私は年間60～80日の山行を続けてきました。1994年のAACKの総会でお会いした時に、ポコさんと意気投合し、私の企画する山行にその後ポコさんを毎年お誘いするようになりました。神戸大学山岳会の海外遠征にそなえて熱心にトレーニングをされているポコさんも、1995年から私の企画する山行計画にたびたび参加して下さり、77歳になられた1997年まで毎年楽しい山旅をご一緒しました。

私の山行記録ノートから、ポコさんとご一緒した山行をご参考までに下記ご紹介致します。

- 1) 1995年7月10日：道場岩登り
平井、阪本、宮川清明、朝倉英子、荒木真弓、西躰宗光
- 2) 1995年11月26日：金毘羅岩登り
平井、阪本、荒木真弓、池田悦子

- 3) 1996年3月4日：蛇谷ヶ峰山スキー
平井、阪本、原田A、能田成、前田司
- 4) 1996年3月30～31日：扇の山スキー登山
平井、阪本、西躰宗光、山村孝夫、小原昭雄
- 5) 1997年3月29～30日：岐阜若丸山スキー登山
平井、阪本、佐藤典子
- 6) 1997年5月3～5日：白山スキー登山
神戸大学山岳会企画の山行、平井、井上達夫さん等と
- 7) 1997年7月5～6日：黒姫一戸隠
神戸大学山岳会企画の山行、平井、井上達夫さん他と
- 8) 1997年7月19～21日：上高地一槍ヶ岳一北穂高岳一横尾一上高地
平井、阪本、佐藤典子、能田成、能田直子
- 9) 1997年11月2～3日：北山鴨瀬谷一八丁川一棚橋谷山
平井、阪本、能田成、居谷千春
- 10) 1999年3月7日：湖北武奈ヶ岳



写真1 2002年2月9日 マキノ赤坂山(876m)にて 右より2人目:平井一正氏 右より3人目:阪本公一

平井、阪本、田中二郎、永田ナマコ、中山ケイハク、清水弘

- 11) 2001年6月10日:八ヶ峰ー白尾山
平井、阪本、佐藤典子、能田直子
- 12) 2001年10月7~8日:皆子山ー峰床山
平井、阪本、佐藤典子、西岡圭子
- 13) 2002年2月9~11日:マキノ赤坂山ー三国岳ー乗鞍岳ー敦賀国際スキー場
平井、阪本、佐藤典子、西岡圭子、八太幸行、能田直子
- 14) 2002年10月5~6日:黒河川沢歩き
平井、阪本、田中二郎、堀内コンゴ、佐藤典子、永田ナマコ、山崎ポマンチ
- 15) 2003年1月11~13日:若越国境縦走 野坂岳ー赤坂山ーマキノ
平井、阪本、堀内コンゴ、朝倉英子、佐藤典子
- 16) 2005年1月20日:北山雲取山
平井、阪本、八木、山田ニタコ、朝倉英子、西岡圭子
- 17) 2005年5月21~22日:峰床山ー芦火荘(笹ヶ峰会親睦山行)
平井、阪本、堀内コンゴ他11名
- 18) 2005年9月22日:北山毘沙門谷沢登
平井、阪本



写真2 2005年1月20日 京都北山雲取山(911m)にて 中央:平井一正氏 左より2人目:阪本公一

- 19) 2006年5月3~4日:北山芦火荘ー焼杉山(935m)
平井、阪本、朝倉英子、佐藤典子、西岡圭子、堀内コンゴ、山田ニタコ
- 20) 2007年7月3日:瓜生山
平井、阪本、四手井靖彦

こうしてリストを眺めて見ると、女性が参加する山行には、必ず平井ポコさんが顔を出しておられたようです。平井ポコさんは、日本山岳会関西支部の嶋岡章さんが運営されていた「近畿周辺の山を登る会」の熱心な会員でもあり、AACKの高野昭吾さん(ゴジラ)と一緒に嶋岡さん達の山行にも精力的に行っておられました。この会も、多くの女性が参加されていたそうです。女性に優しいポコさんは、「ポコさんも次の山行にご一緒されませんか?」と、女性たちから誘われておられたのではと推測されます。

AACKの海外遠征に参加した人達も50歳を過ぎると山登りをやらない人が殆んどようですが、平井ポコさんは何時までも山登りの情熱を持ち続け、本当にお元気に山旅を楽しんでおられました。積雪期のラッセル山行も、元気いっぱい活動されていました。私の最も尊敬する大先輩です。

ポコ追懐

左右田健次

ポコ逝きぬ。

昭和27年の秋、山岳部1回生の私は相国寺畔の下宿を引き払って銀閣寺前、疏水が白川をくぐり抜ける交差点近くの家々の2階に移りました。中島ダンナのお世話でした。私の下宿は大きな堀家の一角で、貴船さんという品の良い老婦人が住む離れでした。本家の広い二間続きの2階には林一彦先輩が住んでおられ、白川を少し上がった小橋の西のしもた屋には斎藤ワイさんが下宿し、少しして橋の東たもとの前川邸の離れに枚方の実家から平井ポコさんが移ってきました。深夜にはかすかに白川のせせらぎが聞こえ、朝早くには疏水べりを散策する和服にステッキをついた吉井勇の姿が見えました。“かにかくに祇園はこひし寝る時も枕の下をみずのながるる”は彼の歌です。堀家の疏水を隔てた南には広大な故・橋本関雪画伯の邸宅、白沙村荘が森に包まれており、その西隣の銭湯を越してさらに南に行くと畑に隣してダンナの下宿があり、後に山岳部に入った中山祐昭さんもここに住んでいました。ダンナの部屋は2階にあり、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』が机上を飾り、旧制高校の空気が漂っていました。白川の少し上流には近藤良夫先輩のお宅があり、白川通りの南に青野オンビキが住んでいました。

夜になるとポコ（平井一正さん）が呼びにきて、一緒に銭湯に出かけました。熱いお湯に浸かっていると、林さんが入って来られ、くぐもった声で「おい」と呼ばれた途端にお湯が水に変わったかのように感じられました。林さんは怖い先輩として知られており、ダンナも直立不動の姿勢で受け答えしておられました。その「怖さ」については林さんの没後、追悼集『黄昏』に寺本ショウちゃんはじめ多くの人々が記されています。しかし、銭湯は別として林さんはポコや私には余り厳しく接することはなく、渋い顔で鼻先で笑うような声で話かけられました。ポコと「きっと、われわれは林さんにとって叱るにも値しない子犬のような存在なんだろう」と慰め合いました。暫くして学位をとったポコは講師として金沢大学に移りました。そしてチョゴリザの遠征に加わり登頂を果たしました。しかし、2年ほどしてポコは京都に舞い戻ってきました。山では颯爽としたポコは下界では、やんちゃぶりを発揮してやや不良少年でした。安田隆彦君と月夜に銀閣寺の塀を乗り越えて庭に侵入し、白砂を敷き詰めた銀沙灘に入り、小高く砂を盛り上げた向月台の上で酒盛りをしたのです。二人はお坊さんに見つかってほうほうの態で私の下宿に逃げ帰ってきました。私が安田に貸した真新しい下駄は見る影もない形になっていました。また、大徳寺のある有名な塔頭では外国人には庭を見せるのに日本人は「お断り」と聞いて、ポコと安田は憤慨しました。チョゴリザ遠征の帰りに買ったネパール帽カマレー帽を安田にかぶせ、ネパール王族「パクリマン殿下」と偽称して怪しげな英語を使って、お坊さんをけむに巻いて庭を見物して「ベリーグッド」とほめて帰ってきたこともあります。

そのうちに林さん、和子夫人は結婚して角の2階建ての一軒家に移られました。銭湯の帰りに毎晩のようにポコと林さんの新婚家庭にお邪魔して、奥様から御馳走に与り、林さんからは山の話、フォスコ・マライーニや米国オレゴンの登山家マクゴーンやフランスのギド・レイなどの話を伺いました。時に林さんの好きな屋台、珍萬のラーメンを買いに行き、ご相伴に与りました。和子夫人の湯上りの浴衣姿にポコは目を奪われ、夜、豊満な姿が臉に焼き付いて寝られないとこぼしていました。間もなく近藤先生も林さんも米国に研究に行かれることが決まり、彼の地でのパーティーに備えるために両夫人は花柳流か何流かの日本舞踊を習いに行かれました。風呂の帰りにポコが和子夫人に踊りの所作を見せて欲しいと頼みました。立ち上がった和子さんは少し腰を引き、手に扇を持つしぐさをして体をひねりながらポンと足先で畳を打ち、嫣然と笑いました。見事でした。私は初めて色っぽさを理解した思いでした。帰りにポコは「また寝られへんわ」とこぼしました。ポコが渡辺

晋一郎の「古典語典」を買ってきて私にも勧めました。二人で勉強し合い「余桃」、「解語花」、「男女同席」などを意味や経緯を覚え、銭湯の帰りに林家でご披露しました。林さんは口を少しゆがめるだけでしたが、和子夫人は熱心に聞いてくれました。林さん一家が武生に帰省される時には林さんの命令で私が家を預かり、ポコだけでなく谷泰君も友達を連れてきて駄弁ったりしました。

そのうちに横浜に住むポコの女性ファンからファンレターが来るようになり、次第次第にエスカレートしてラブレターに変わりました。ポコはその度に、きれいな文字で書かれた手紙を私の下宿に持ち込み、二人してお返しのラブレターを書きました。ある時、「梅の美しい香りの漂うこと」を表す良い言葉があった筈だから思い出せとポコの命令でした。あれこれ考えて「馥郁たる香りか？」というのと、ポコは喜んで早速ラブレターに「馥郁」を書き込みました。このラブレター共同執筆の件についてはポコ夫人きよ子さんは生涯知らずじまいでした。やがてポコたちは結婚することになりました。結婚式は京大・楽友会館で、仲人は桑原武夫先生に決まり、私は酒井オシメさんと岩坪五郎さんと一緒に司会をつとめることになりました。ところが前日、桑原先生が急病で入院されてしまわれました。思案の末、並河功先生ご夫妻にご無理をお願いしたところ、ご快諾をいただいて安堵し、楽しい結婚式になりました。ポコ夫妻は白川沿いの大きな農家の離れで新婚生活を始め、わたしは二、三度、奥方の手料理のご馳走に与りました。新婚早々のポコ夫妻と小谷温泉にスキーに行き、周りの山を歩きまわったこともありました。また、ポコ夫妻と一緒に寝屋川に隠棲された並河先生を訪ね、庭に咲き誇るバラの歴史やヨーロッパ旅行やシェイクスピアなどの話を伺い、虎屋の羊羹をご馳走になりました。この頃、高村デルファーが「銀閣寺界隈に住むとみんな少し不良になりますね」といったことがあります。なるほどと思いましたが、ゲー

テの教養小説の愛読者、中島ダンナだけは不良化とは無縁であったと思います。サルトロ・カンリの計画が始まった頃、デルファーは私の下宿の隣部屋に引っ越してきました。深夜になるとデルファーから襖越しに誘いがかかり浄土寺裏の飲み屋に行きました。飲めない私は割り勘にすると便利だったのです。デルファーは飲み屋の女将の肩を抱いて「小松五郎を胸に抱き」と歌い、大いに飲みました。小松五郎義兼は刀鍛冶の名で、その銘を打った刀は侠客、国定忠治の愛刀です。芝居では赤城の山で子分たちと別れる場面にも出てきます。真面目なデルファーも銀閣寺界隈に住んで少し不良がかったのかもしれませんが。やがて、近藤先生も林さんも米国に発たれ、ポコ夫妻はドイツ、シュトゥットガルトに旅立ちました。私は関雪邸の東に接する下宿に引っ越し、間もなく結婚してボストンに向かいました。

今にして思えば、この時代はポコにとっても林さんにとっても私にとっても、またとない青春のひとつきでありました。この時期、ポコはやんちゃをしながら専門分野の勉強や研究においても、また登山においても、研鑽に研鑽を積んでいたと思います。数々のヒマラヤでの山歴はこれを証して言わずもがなですし、またシステム工学の分野でのパイオニアであったことは後年の叙勲、瑞宝中綬章の受賞にも表れています。最近、世評に高い半藤一利は『昭和史』2巻に続いて刊行した『B面 昭和史』（平凡社、2019）で身辺の些事、雑事から昭和の時代を描き切っています。それにならえば、私がここに書いたことはB面のポコです。A面のポコ、つまりシステム工学分野での平井一正、ポコとヒマラヤ登山におけるポコについては多くの方々が縷々記されるでしょう。しかし、A面とB面とが一体となった所にポコ、平井一正という稀有な人が存在し、生きたのです。

ポコにはもう少し長く生きていて欲しかったと強く思います。

ケチノーザン万福寺省エネ大兄

谷 泰

平井ポコさん、あなたはポコというあだ名に加えて、若き日よりすでに「ケチノーザン」という立派な称号の持ち主でした。コンパなどで、みんなで少し贅沢をして、カネをはずもうなどと、みんな賛成しているのに、「おれ、そんなことにムダ金つかうのいやや」とケチり声を上げる。すると、樋口のジャンさんが、頬をほころばせながら、「ケチノーザン・万福寺！」などと口走っていたのを覚えています。宇治の「黄檗山万福寺」をもじって編み出した称号だとすれば、宇治分校に通っていた一、二回生のころすでに獲得していたものか。とあれ、この「ケチさ」、そのまま「ケチ」と言えばややネガティブな響きをもつが、ポジティブに解せば「無駄を排する」、いわば「省エネ」。

ポコさんが、藤平さんといっしょに、サミッターとしてチョコリザの頂きに向かった折、藤平さんがけっこう消耗の度強く、苦勞していたのに、ポコさんはいたって元気、トップを切り続けた。このことから、「あの小さいからだのどこにあれだけのエネルギーが蓄えられているのか。いや、あの小さい身体で、かれは、エネルギー消費をかぎりなく低く保ちえたのだ」などと言われて、「省エネ」のポコという称号を賜ったことが思い出されます。無駄を排するケチ精神と、無駄を排した省エネの身体と、ポコさんにあっては、「無駄を排する」という点での同じ原理が心身においてひとつになって働いていたということになります。ところで、あなたは、はっきりものを言う関東育ちの奥さんに見初められて結婚しました。そして、「うちの平井は」などと、臆せずものを言う奥さんを見て、はたのわれわれは、「ポコさんあんたの奥さん怖いなー。尻に敷かれてるんとかやうか」

などといじめたものでした。それに対して、ポコさんあなたは、その冗談じみた揶揄に反抗するどころか、「そーや、わしもほんまに怖い、怖いねん」と笑みをたたえて答える。茶化されてムキになる人は、その抵抗努力が無駄にエネルギーを消耗するけれど、ポコさん、あなたは、ここでも無意味な抵抗を回避して、不必要なエネルギー消費を避ける術を身に付けておられた。

そうそれでよくわかったのです。それこそ難しい非線形微分方程式などを駆使して勉学に励まないと、まともに卒業できないような工学部電気工学専攻者の立場と、海外登山遠征という、学者として求められる時間を、そのために多く割かねばならない立場と、杓子定規に同一平面上でAかBかと思案すれば、時間の割り振りをめぐる二律背反に悩み、無駄なエネルギーを消費しなければならない。そういう二つの道を、AもBもスルリと許容させる解を、非線形微分方程式で見出して、ここでも上手に省エネしていたのかと。

そして最後の別れの会場で、ポコさんはご自分の業績を卓上に並べておられた。そこに「制御工学」とかいう題の著書を並べておられたのを見て、はっきり解ったのです。ケチノーザン時代から最後まで、ポコさんは制御工学とでもいえる計算技法を身に付けて、無駄なエネルギー消費をミニマムに留めるための解をみいだして、生きてこられた。だからいつも人に対するに、あんなにいつもここにこしておられた。でもそれをわたしたちに教えてくれなかった。だから、ポコさんは、省エネだけでなく、やはり「ケチノーザン万福寺！」だということが。

故平井一正君の思い出

中島道郎

彼は京大で私より1年後輩であった。即ち、私は新制京都大学医学部第一期生で、彼は新制工学部第二期生であった。新旧学制改革は複雑でスムーズに事が運ばず、新制第一期生が1950年9月になってやっと発足出来たところに、第二期生は当初の予定通り1951年4月入学の運びになり、その学年差は実質1年ではなく6ヶ月だったので、1951年春の部室はまるで新入部員で一杯、の状態だった。その上、どうした訳か、当時旧制京大山岳部の2年目・3年目の学生は数が少なく、新制新入部員全体をしっかりと指導する事が困難な状態にあった。でも、僅か6ヶ月間ながら2年生になった新制第一期生の中には、旧制高校山岳部を1年間体験し、未熟ながら登山技術の初歩を身に付けて来ていた者が数人いた。だから、その未熟・不完全な技術のまま新入部員を指導する立場、という不自然な体制になってしまっていた。その中で私一人はまた特別で、しっかり後輩を指導する実力を身に着けていた。と、言うのは、ここで自分の恥を晒すことになるのだが、私は旧制兵庫県立豊岡中学校を四修で旧制松江高等学校に入学した迄はよかったのだが、それでクラスの学習について行くのはなかなか大変で、このままストレートに京大医学部に進学できるのかいな？と、甚だ自信がなかった。そこへ、敗戦に伴うアメリカの指導で、日本の学制が全く変わることになった。大学進学に自信を失っていた私はこれ幸いと、何もしなければそのまま旧制大学へ進学の道から、敢えて新制大学への道にシフトしようと試み、それがうまくいって、1950年9月新制京大医学部に入学、1951年4月にはその二年目に収まっていたわけである。私は旧制松江高校では山岳部に属し、伯耆の大山で、無雪・有雪の四季を通じて熱心にトレ

ニングに励んだので、かなり登山技術に自信が付いていた。だからこういう事態になっても臆することなく、新入生を指導することに喜びを感じていた。

そこに新制第二期生（1951年4月入学組）が入部して来た。早速、金比羅山で岩登りを実地指導することになり、一通り講義のあと、新入生一人ひとりに実地にやらせてみると、これまで岩登りは経験したことのない全くの初心者集団の筈なのに、一人、体の動きがしなやかで、器用に登ってゆく男がいた。聞いて見ると、どうやら高校では、器械体操部だったとかで、「なんと器械体操部出身者というのは動きが違うんだなあ。」と感心させられた。それが平井君だったのだ。此処まで長々と書いてきたのは、要するに平井君という男は入部の最初から岩登りの名人だった、ということを書いたかったのだ。

さてもう一つ。彼のあだ名“ポコ”の由来をご紹介します。これはもう単純な話で、由来などと形式ばって言うほどの話ではないが、ある日、部室で雑談中、話題があだ名になった時、私が「そういえば、松高時代のクラスメイトの妹さんにポコさんと呼ばれるメッチェンがいたけど、あの人、その後どうしているのかなあ？」と言った時、平井君が「ポコさん？ おもしろいあだ名やなあ。」と、言ったので、「これ、おもしろいか？ そんなら、お前のあだ名はポコにしよう。」その場で全員賛成、こうして彼のあだ名は即決された。このように、たわいもない動機で彼のあだ名は決まったが、不思議なことに、それは何となく平井君の雰囲気に合わせていて、爾来半世紀以上にわたって廢れることなく、彼はそう呼ばれ続けてきた。平井君、いやポコさん、これからもずっと我々を見守っていてくれ給えね。

思い出すままに

並河 治

ポコさんが私の知らない世界に行ってしまった。90歳との連絡が入ったが、89歳ではないか。あれほどの秀才が浪人したとは思えない。私は今88歳、ポコ（平井一正さん）は1年上である。

この訃報に接した時、私の心は安定していた。高村デルファーや笹谷べべちゃんの時のショックとは全く違う。何故だろう。仕事で付き合い残っている人はごく僅か、自分より年上の人は消えても感じなくなるほど情無い人になったのか。

1951年、私が京大山岳部に入った時の先輩は旧制高校出身の旧制大学生（築山、山口、藤田、脇坂など）、旧制高校1年を経験して新制大学に入った人、その中には海軍兵学校を経験した人などがいた。ポコさんの学年は新制高校を卒業して新制大学に入った1期生とも言えた。言えたというのは、旧制高校1年から新制大学に入るのに時間がかかった人もいたから。旧制高校の山岳部を1年でも経験した先輩は山岳人としても、人間的にもまさに大人と感じられた。

ポコさんの同期も多士済々であった。高校国体の距離スキーにも出た菊池クメロー、岩登りの名手松田カメ、夏、冬いずれの山行にもバランスのとれた寺本ショウちゃん、井上トッキーなど……。その中でポコさんは旧制高校出身者に可愛いがられ、鍛えられ、持ち前の素養を伸ばして行ったのではなかったか。合宿では藤田シャクさんとパーティーを組んで難コースを登り、冬は体力のある脇坂ザッカスと行動を共にしていた。

ポコさんの第一印象はオシャレであった。町中ではシャレたベレー帽をかぶり、茶系で上下色違いのバランスの取れたアンサンブル。山では鹿皮の尻革、小柄で細い体型、よくあれで自分と同じぐらいの重さの荷物を担げるものだと思った。（ショウちゃん、山口さんも同様。）

昼休みにはいつも山岳部の部室に来ていた。座ったままであまり喋らない、ルーム日誌にもあまり書かない。怒りもしない。それでも部室の常連であった。私が言った。「昼休みは毎日部室に来ることが楽しくて、つつい同級生と

の付き合いが少なくなる」。ポコが言う。「わしもそうやね、ボケもそうか」。ポコさんは自分のことをオレと言わずワシと言っていた。

1957年の秋からチョゴリザ遠征の準備が始った。ポコさんは装備係。私は西北ネパール行き装備を担当していたので毎日付き合いしていた。実に楽。キスリングやブーツ、アイゼンなど。「ボケ、あんたのとこいくついる。そうか、全部でいくつやな、注文しとくで」こまごまとノートに記入している。私は何もしないで準備完了。西北ネパール隊には努力したようないい顔をしていた。

チョゴリザでのポコさんの活躍は私の述べる所ではないが、誰かが言った「やっぱりポコはロケットの弾頭としては向いているなあ」。これほど彼に対する無理解はない。神戸大チベット学術登山隊の総隊長としての交渉力、指導力は、多段ロケットの基部から弾頭まで、どの部分でも目標に向かって軌道を正しく進ませる役割を果たした人材である。

20代の半ばから私は関東に移り、京都の岳人達とは会うことはなくなったがポコさんの書くものは読んでいた。山登りの歴史、その背景、京大山岳部の先輩の生きざまなどを細かく調べた調査能力と、極めて読み易い見事な文章力には呆れ果てていた。まとめもうまい。本職のシステム制御工学については私はチンプンカンプンであるが、本職を外れた分野でこれだけの文章を書き続ける努力とやる気には、「ポコ、あんた年いくつやね」と言いたく思っていた。

ポコさんから時には電話が来た。「ボケか？ 平井や、花頼めるか、〇〇さん呼んで集まるんや、場所は××それじゃ」、「ボケか？ AACKとは違うけど、△△大の山岳部、西岡京治さんのこと調べてるらしい、会うてやって」。要件だけで無駄はない。もう会えない、電話もこない、仕方がない。

これまでポコさんと書いたが、会う時はポコである。私が新人として入部した時、藤田シャクさんがのたまった。「山ではリーダーとフォロワーの違いはあるが、下界では上も下もな

い。上級生でも人は同じ、あだなで呼ぶか、姓を呼び捨てる」。ポコからの最後の tel 「ヨメ

さん大事にしや」。

ポコさんを偲んで

西山 孝

ポコさんという名前を初めて知ったのはチョゴリザ登頂報告会のときだったと思います。桑原先生が登頂者として平井さんをあだ名とともに紹介されました。その頃は頭から登頂者はいかつい人だろうと想像しておりましたので、小柄でひょうひょうとした人物に意外な印象を受けました。その後、京大山岳部に入部し、ときどきお会いする機会がありました。登攀ルートについてするどい目をもった、すこし私には距離のある光る存在というイメージをいただきました。しかし、いつのころかは思い出せませんが、分け隔てのない、敬語をつかわなくてすむ先輩になり、住まいが同じ方向ということで、よく阪急電車や車のなかでたわいのない雑談をかわしながらかえったことがありました。

最近はおつばら斎藤診療所でお会いするようにかわっていました。ながいおつきあいをいただき、いろいろな思い出もありますが、もっともお世話になり、印象にのこっておりますのはカンペンチン遠征隊のときです。ほかの方もお書きになるかと思いますが、日中友好条約が結ばれて AACK がチベット高原からのヒマラヤ登山許可を得たのは 1982 年でした。中国登山協会との紆余曲折の折衝の結果 AACK にはネパールと中国の国境にあるランタン・リの登山許可があり、偵察も無事終了しました。ところが、ここでハプニングが起きました。ランタン・リがネパール側から登られてしまったのです。未踏峰にこだわる AACK としては転進を余儀なくされました。急遽、あたらしい山をさがしましたが、おなじ谷の入り口にある独立峰カンペンチンをのぞいて適当な山は見当たりませんでした。ところが、カンペンチン峰は、すでに 1983 年の登山許可が当時神戸大におられたポコさんのところにおりました。しかし、一年ずれているということを利用して AACK にゆずっていただき、私たちはホッとしたのでした。その後、神戸大学はクーラカ

ンリ初登頂に成功していますが、その報告書にポコさんは“…1982年に京大隊が初登頂に成功したために、せっかくの努力も水泡に帰し、交渉は振出しに戻ってしまった”と書かれています。やっかいな交渉を一人でおこない、ようやくえられた許可ですから何ともやるせないお気持ちだったろうと思います。わたくしたちも後ろめたい気持ちはかくせませんでした。

このようにして成立したカンペンチン隊でしたが、出発の折に機内で読むようにと個人的な手紙をいただきました。40年ほど前の海外遠征のことですから登山許可とともに多額の経費を集めることが必須条件でした。隊の秘書役を担当していた私は出発のころは募金でくたくたになっていました。したがって、その手紙もいよいよだ、がんばれよとでも書いてあるのかと思っていましたところ、内容はラサで帰ってきてよろしい、隊への役目はすでに十分果たしているというものでした。というのも出発前の身体検査で心臓に障害が見つかり、富士山の高さに相当するラサで高山病になるかもしれない、私がかっかりして落ち込まないようにという配慮からでした。こまやかな気遣いにたいく感激しました。さいわい、心臓は最後まで重大なことにはならず遠征は終わりました。このようなこまかい気配りがあったからこそ、そのちに行かれた神戸大のシェルピカンリやクーラカンリなどいくつもの遠征で全く事故がなかったのだと思います。

またポコさんは語学にもすぐれた才能をお持ちの方でした。テレビとテープで中国語を勉強され、たびたび訪れる中国の登山仲間とも会話ができるようになっておられました。語学の苦手な私はうらやましいと思ったものでした。ポコさんは京大工学部で特別講演をされたことがありました。“カオス”にかんするものでした。神戸大学に移られて間もないころではなかったかと思います。同じ学部におりましたが、電気

工学の講演はいつもえらい先生のむつかしい話が多いので避けることにしていました。このときも出席しませんでした。今になればきいておけばよかったと残念に思っています。システム工学に関する専門書なども出版されていますが、私の書棚にはいただいた『天帝の峰に挑む』や『わが登山人生』などの本がならんでおりま

す。数年前に私が本を書きました折に、Yさんの診療所だったと思いますが、ポコさんが、わかりやすい、大切なことやとって驚いたような、少し皮肉っぽい笑顔でいってくださった姿が思い出されます。

ポコさん、ありがとうございました。

平井ポコさんを偲んで

芳賀孝郎

平井兄のご逝去に衷心よりお悔やみ申し上げます。

小男のポコさんはチョゴリザ隊員の中で一番長生きする人間だと彼自身、自信ありげに話していた。私も大男で長生きをしている人は知らない。ポコさんは横 有恒氏や私の岳父・三田幸夫の体形とよく似ているので長命と思っていた。しかしそうではなく、悲しい。

私がポコさんと最初に出会ったのは、1955年12月28日、私の仲間4名が鹿島鍾で遭難した時、脇坂氏と共に捜索に協力してくれた時である。ポコさん達は鹿島鍾から黒部を横断して立山・剣への計画であったが、鹿島鍾頂上で猛烈な悪天候に遭遇して撤退した時であった。最後に会ったのは、2019年11月の学習院山岳部100周年記念祝賀会であった。

1958年チョゴリザ隊では、私はポコさんと共に神戸より飯野海運・若島丸で出発した。登山隊の装備2トンと一緒にあった。コロンボからは装備と共にKLMに乗り換え、初めての飛行機に乗った体験をした。

チョゴリザ登山では、ポコさんは素早く高度順応し、一番強かった。私はポコさんがいなくては登頂が不可能と思った。チョゴリザ登山後、私はポコさんと一人のポーターと共にムスタグ

タワーの横のピアンジェ氷河からステステサドルまでの偵察をした。その後、5400mのBCから無名峰7170mヘラッシュアタックを試みた。7100m地点からの岩峰を登り始めたが難しいルートであった。ポコさんの「帰ろう」の一言で勇気ある撤退をした。ポコさんはヘルマン・ブールの二の舞になりたくない気持ちであった。

ポコさんはその後、1962年サルトロ・カンリ登山隊に参加した。1976年シェルピ・カンリ登山隊長、1986年クーラ・カンリ登山隊長、2003年ルオニイ登山隊長の重責を果たした。半世紀にわたるヒマラヤ遠征でルオニイ峰を除いてすべてが初登頂である。しかもいずれの登山も無事故である。この記録はポコさんのリーダーシップの証と思う。且つ運にも恵まれている。ポコさんは、自分でも山の神がついていると自慢していた。私もそう思う。

私の書斎には、私が尊敬する登山家、エルゾグ、ヒラリー、ボナッティ、メスナー、ボニントンの写真と並んでポコさんがヘルマン・ブール夫人と一緒に撮った写真が掛けてある。平井一正・ポコさんはそれを見て大喜びした時の顔を思い出す。天国でのルートファインディングをして待っていて下さい。

合掌

平井一正先輩への追悼文

藤本栄之助

平井大先輩ご逝去の報に接し、まさに「泰斗落つ」の衝撃を受け呆然としております。平井先輩は多くの偉大なる AACK の諸先輩の中でも、私にとっては決して揺るがない「北極星」のごとき羅針盤の示すような目標でした。AACK はそれ以前でも、確かにアンナプルナ IV 峰、マナスル登頂者、カラコルム・ヒンズークシ探検隊などの輝かしい歴史はありましたが、チョゴリザ登頂という京都大学が単独で成功した栄光を完成した人として、私の胸に強烈に刻み込まれた人物でした。

チョゴリザ初登頂の 1958 年、京都大学時計台下の法経第 1 教室での報告会で超満員の聴衆の中で、桑原武夫隊長の総合的な報告の後で、平井先輩の初登頂に至る生々しい経験談を手に汗を握りながら拝聴したのを、昨日のこのように思い出します。

私は探検部に在籍していました（1956 年入部、第 1 回生）から、平井先輩から登山技術を教えられたこともなく、ましてや登山に同行したこともありません。それだけに平井先輩は、私にとって遠い「北極星」のように決して手の届かない憧れの人に過ぎませんでした。

私は 1960 年理学部化学科を卒業し九州の田舎の工場に就職しましたから、京都ははるかに遠い存在になり、その後の AACK および京大山岳部の偉大なる功績、ノシャック、サルトロカンリ、インドラサン、ガネッシュそしてヤルンカンなどの栄光を、九州の田舎で新聞報道やテレビで知るだけでしたが、2010 年のノシャック初登頂 50 周年記念行事をポーランド隊と共同で祝う会の企画に、私が多少ポーランドにも縁があったために参加し、アンチョコ会 (Ann-Chogo) 20 数名でポーランドを訪問したことで、憧れの平井先輩に親しく交流できるようになり

ました。

AACK と探検部 OB 会の合同で参加した 2001 年のカムチャッカ半島最高峰「クリュチェフスカヤ (4880m)」登頂記録『遙かなるクリュチェフスカヤ』を平井先輩に贈呈し、その内容と文章を高く評価していただいたのが最高の思い出です。このことをきっかけとして、ただ遠い憧れの人だった平井先輩の心の一番近い場所に寄り添えた幸せを今でも感じております。平井先輩はそんな私でも優しく受け入れてくれる心の暖かい人でした。

時代は流れ、激変してゆき、世界の未踏峰がなくなり、地図上の空白地帯も埋め尽くされ、もはや Pioneer Spirit を発揮できなくなったと、最近の学生は山岳部や探検部に入部する人が激減したと聞きます。そのことを平井先輩はもっとも憂慮して天国へ昇天されたと、私は悲しんでおります。

トルストイの小説はトルストイにしか書けません。ゴッホの絵はゴッホにしか描けなかったでしょう。チョゴリザの頂上には平井先輩と藤平先輩だけが立てました。しかし、トルストイの小説に感動し、ゴッホの絵画に感化されて共通の理念に到達することは可能です。平井先輩の足跡を辿り、先輩の栄光を共有できるほどに自分の心身を鍛えて、先輩の心に寄り添うことはできるはずでです。平井先輩に代わって、若い学生諸君にこのことを伝えたいと思います。

平井大先輩、これからも先輩の足跡をたどり、先輩が到達されたチョゴリザの栄光を共有できるように、世間の片隅にいても努力を続けることを誓い、お別れの言葉を捧げさせていただきます。

合掌

バルトロ氷河にて

古瀬駿介

数々の困難なヒマラヤの高峰を初登頂しておられる平井一正（ポコ）さんにも、私がお一緒した「のんびり」した山行もありました。しかし、私にとっては、それがポコさんとの初めての出会いであり、かつ、素晴らしい山行でした。

1998年8月、チョゴリザ初登頂40周年記念バルトロトレッキングが行われ、AACKから6名、山岳部OB2名、学習院山岳部関係者ら総勢15名が参加しました。目的は、アスコールからバルトロ氷河を登り、チョゴリザのベースキャンプでもあるコンコルディア（日本の穂高で言えば涸沢のようなところ）へ行き、チョゴリザを眺めて来るというものです。

氷河の上は、予想に反して氷が切れて、起伏が激しく、ザイルやピッケルが必要なところもあり、氷河を登るだけで4、5日を要しました。その間、マッシュルームや、トランゴタワーといったすばらしい岩峰が、次から次へと現れ、ヒマラヤのすばらしさを堪能しました。

ところが、私は不覚にも酸欠を起こし、コン

コルディアの手前でリタイアとなりました。ポコさんは「AACK ニュースレター No.10」で、このバルトロトレッキングのことを報告されていますが、そのなかで「8月13日（晴れ）Fが夜半すぎから呼吸困難になり、ここから下山してパイユで待ちたいと言う。ポーターを2人つけて降りることになった。ポーターからお湯をもらってあとは持参の即席ものでなんとかすごすだろう。余分のコンロがないためである。」と記されていますが、このFが私のことです。2、3日後にはメンバーと合流し、一緒に下山したのですが、私にとっては、精一杯の山行だったのです。この山行では、ポコさんには本当にお世話になり感謝の気持ちで一杯です。

私はかねて「あだ名」は不思議と本人の一面をとらえていると思っているのですが、ポコという軽い印象を与えるだけに、実はその余韻に何かを感じるべきものがあるのではと思ったりもしております。

ポコさんのご冥福をお祈りいたします。

「温故知新」の人

前田 司

私は京都のど真ん中の映画館などが並ぶ繁華街で生まれ育った。小学校も中学校もこの街中。おかげで文部省の特選映画が来ると朝の授業は学校中揃って近所の映画館で団体鑑賞となる。ディズニーの白雪姫やシンデレラ、4年生の時は「エベレスト登頂」を、中学校では「マナスルに立つ」、「カラコラム」そして「チョゴリザ」の記録映画をすべて学校から団体で観に行った。しかしどれも宇宙飛行を見るように異次元の記録であった。

私が高校1年生の生物の時間、先生が「前に赴任していた京都府立桃山高校の教え子がヒマラヤのチョゴリザという山の初登頂を果たした」という話をされた。ここでその初登頂者が平井一正という人であることを知る。当時は山

にも登るようになっていたのであの映画を見たときの異次元の世界がいくらか身近に感じられるようになった。やがて進学を京大、それも山岳部に目標を据えたのも生物の先生を介した平井一正という大先輩と細い糸がつながる思いがあったからである。

一浪の末山岳部に入る。その頃この前年の11月滝谷で遭難された加納さんの捜索で現役とともに多くのOBが加わっておられた。その中で実物の平井一正さんを見る。へーこんな小さい人が・・・これが第一印象であった。

2回生の時、部費の捻出に当時どこのクラブもやっているダンスパーティを目論んだが、OBから大目玉。軟派なことに加えて人の真似をするなどということである。パイオニアシップ

の洗礼を受ける。そこで考えたのがチョゴリザの映画会と講演会。京都新聞社のホールを借り講演を平井一正先輩（以下ポコさん）に依頼。この時からポコさんと身近に話ができるようになった。

1998年、チョゴリザ初登頂40周年を記念してポコさんを隊長にチョゴリザ遠征隊員をまじえて、チョゴリザを眺めるバルトロトレッキングが企画された。この時私はチョゴリザの桑原隊長と同年の54歳であったので隊長の気持ちを知れるかとも思い女房とともに参加させていただいた。残念ながら日程の関係から遠征隊員で参加したのはポコさん一人になったが、AACK会員から酒井、井上、新井、高野の各先輩と私、KUACのOBから2人、学習院の山岳部よりOB2人、OG2人と他にJACの女性2人に心もとない女性が1人の15名のパーティが編成された。8月3日成田を出発、5日スカルド着。チョゴリザ遠征隊はここからキャラバンが始まるが我々は翌日ジープで6日の行程を1日でトンガルへ。40年前日本を発ってここまで来るのに数ヶ月かかったことを考えればポコさんには夢のようであったろう。

ここからキャラバンが始まる。初日の行程が長かったことからか、メンバーの多くがひどい下痢にかかった。40年前に比べて日本人の腹の中はあまりに清潔に浄化され過ぎているのだろうか。このあとは順調にキャンプを重ねる。チョゴリザの映画で見たバルトロの風景が今まさに目の前に広がってゆく。ポコ隊長は昔の恋人に会いにゆくかのように浮き立って、ガイドのアリとどんどん進んでゆく。ポコさんにとっては、ポーターのトラブルは無し、食べるものはうまいし40年前と比べれば楽しい気楽な道中であったろう。しかしこのトレッキングの初日のミーティングで、ポコリーダーは今日一日のメンバーの足取りを見て、学習院の女性2人にこの先のトレッキングは無理とフンザ観光に向かうよう指示された。たとえば5000mまでのトレッキングといえどもかくなる厳しさを見せたポコさん、何度もヒマラヤの未踏峰の遠征隊の隊長となり、どの隊も無事故で初登頂に導いたポコさんの山に対する真摯な取り組みを改めて見せてもらった。

私はこのニューズレターの2007年の43号から2013年の66号まで編集を担当させてい

ただいたが、前任の田中昌二郎さんからこの編集は集まった原稿の順番を決めて印刷所に渡すだけやと言われそれならと安請け合ってしまった。さて編集となっても原稿はさっぱり集まらない。慌てて執筆を頼み回ることとなる。ここで助けていただいたのはポコさん。1996年に高村泰雄AACK会長が会員相互の連絡研修が活発になることを願ってこのニューズレターの発行を企画されたが、その発起人にポコさんも加わっておられただけに、新米の編集者に同情していただき以後ほとんどの号にいろいろな記事を書いていただいた。サルトロ50周年の特集で座談会を企画した時には積極的に音頭をとっていただいた。

2011年の6月に1960年代におけるAACK会員の遠征・登山活動の記録をAACKアーカイブスとして整理、保管する作業が提案され、その委員にポコさん、酒井さん、高村さんと事務長の竹田さんに加えて、古本屋という古い文献の売買を生業にしているからであろうか、なんの遠征の経験もない私が選ばれた。

酒井さんの委員長のもとに10年間の遠征や調査隊の記録が取り上げられた。中でもノックとサルトロ・カンリの遠征隊の記録が多くを占めた。特にサルトロ・カンリは遠征隊実現に至る交渉の記録文書が残っており、オリジナルの持つ生々しいオーラに触れることができた。隊員が保管している写真などの画像はカビ汚れや退色を修正されアーカイブ資料に加えられた。こうした作業はポコさんにとっては人生の集大成とっておられるのかとても熱心に取り組まれた。

ポコさんを知る多くの人が、ポコさんはケチで、せっかく新しい遠征隊から支給された装備や服があるのにいつまでも前のものを使っていると。しかしこれは資料と同じく遠征の物品も大事に保管されているのである。昨今断捨離が流行ってなんでも古いものを捨ててしまう人が多いが、こうした器物の保存も大切な歴史資料となる。現にポコさんは京大の博物館にチョゴリザの装備などを展示資料に提供されている。登山をする上で軽量化、有効性などからどんどん装備も衣類も改良されてはいるが、かつての遠征隊がかくなる重い、不自由な装備で、保温性も劣る衣類でジャイアンツに挑戦していたかは実物を手にして初めて理解できるものである。

ヤルンカンの反省会で、アタックの二人が下山路を見失い徘徊して遭難に至った点について、今西錦司先生は「君たちはトランシーバーの指示に頼り過ぎたのとちゃうか」と文明の機器に頼りすぎる過ちを指摘された。これが全て正鵠をついているとは思えないが、いま一度立ち止まって振り返ることの大切さを教えられた。数々の遠征隊を遭難無しで成功に導いたポ

コさんはこうした新旧のタクティックスを心得ておられたに違いない。古本屋が座右の銘にしている「温故知新」という言葉、ポコさんは山にしっかり生かしておられたのである。古本屋の私と馬が合った所以かもしれない。

どうか安らかにお眠りください。

合掌

ポコさん、よい一生だったね

松井敦男

平井一正、ポコさんの家系は、公家であった。公家は、社会的地位は高かったが、強大な権力があるのではなかったから、周りの人物をよく観察し、それぞれの人に応じて接し、上手く生きた。ポコさんの言動には、お公家さんの気風が染み込んでいた。

公家は、友人や知人達にお膳立てしてもらい、行動するのが習わしであった。ポコさんも同様で、彼自らが、しゃしゃり出て、仲間の先頭に立つのではなく、周りの友人知人達が準備して、願ひすれば、役を引き受けていた。

70年も昔の話だが、ポコさんは、しばしば、ザッカス-ポコという組み合わせで、山登りしていた。その組み合わせでは、常に、ザッカスが主導していた。ザッカスが年長であり、ザッカスが主導するのは自然なことであった。ポコさんは、人を見て、良い相手を選んだのだ。ザッカスは、心優しく、いつもポコさんを持ち上げ、心配りを欠かさなかった。チョゴリザ隊員の選定において、ザッカスの強いそして適切な後押しがあり、ポコさんは、隊員に選ばれた。そして、初登頂者になった。

神戸大学在籍中に、山登りがお好きな皇太子(現天皇)が、彼の教授室を訪ね、山の話をお聞きであった。山の写真が複数掲げられた部屋で、皇太子はチョゴリザ登頂の話などを存分にお楽しみになったことであろう。そして、普段

一般人と接する機会の少ない皇太子は、ポコさんに接し、たわいもない会話の中に、人の生き方について、貴重な知見を得られたのではなからうか？ 彼としても、皇太子と直接面談して、光栄であったろう。

ポコさんは、自分自身の生活を振り返り「幸運な人生であった。充実した人生であった」とつぶやいていた。もちろん、世の中すべてが、常に好都合であることはない。彼の身近には、周りの人に愛想よく対応する人物が居た。しかし、ポコさんは、その人物が、上位職の獲得に夢中であることを見抜き、不機嫌であった。でも、ポコさん自身に、その人物が、直接の被害を及ぼすことではなかったのだから、まあ良いではないか。そういう人物は、路傍の石と見做しておけば、それまでのことだ。

幸せいっぱいであったと言う彼に、人生の終わりは遠慮なく近づいた。一年ほど前だった。斎藤Y病院の待合室で、彼と会った。話は弾んだが、彼の顔色が青ざめていたので、血液の循環が悪いと思った。彼の言葉の端々から、自宅では、体を動かしていないと推察した。体を動かして、血液の循環を活発にもらえるように、メールしようと考えていたが、メールしそびれているうちに、訃報が届いてしまった。

ポコさん、あの世でも、幸せだった日々を、何度も思い出して下さい。ご冥福を祈ります。

素直さのお手本、平井一正先輩へ

松浦祥次郎

謹んで追悼申し上げます。

ポコ（平井一正）さんが逝かれたのはCOVID-19によるパンデミックで全国的に緊急事態宣言が発令されている最中であったため、お通夜にも告別式にも東京からは気になりながらも、お参りできませんでした。後ほど、ご葬儀にはかなりの数のAACKメンバーが参列したと聞き「良かったなあ」と心底思いました。

ご葬儀に供えるお花を注文する時になって、ポコさんとはもう随分お目に掛って居ないままだったことを想い起しました。と同時に実兄の山口克とポコさんが特に親しかったことを思い出し、兄が存命なら間違いなくお花を供える事を想像し、異例で失礼かとも気にしながら「故人 山口克」と私の連名の一対をお供えしました。

ポコさんのお顔を思い出すと、不思議にちょっと目を細めた、にこやかな表情しか思い浮かびません。と同時に「85歳の今までに、あんなに素直なお人にはお目に掛ったことがないなあ、人生最高の素直さのお手本のお人だった」との想いのみです。その一方で、ポコさんに親近感を不思議なほど強く感じるのに、山をご一緒した記憶がほとんどないのです。振り返ってよく思い返してみますと、それはポコさんと兄の関係の深さの故だったのかも知れません。

ご一緒したことが記憶に残っている山行は2回だけです。その一つは確か2回生の正月に細野から唐松岳への尾根を登った雪山でした。今から思えば誠に奇妙な組み合わせのパーティで、リーダーが兄、そしてポコさん、本多勝一、曾根原恵夫、私でした。この冬は豪雪の年で、尾根登りの深雪は壮烈なラッセルでした。背中には、今はもうお目に掛ることもない京都・一沢帆布店のごついキスリング。その両サイドに4リットル缶のケロシンを入れ30kgはある荷物でした。この時のポコさんの馬力にはほんと驚きました。若い時は、私も馬力ではかなり自信を持って居ましたが、この時のポコさんには「小さく、華奢に見える体やのに、ようもこ

んなに頑張らるわ」と舌を巻いた記憶が鮮明です。初日のテントを黒菱小屋上方の尾根に張りましたが、ここで酷い風雪に三日三晩閉じ込められ、結局雪が止んだ時には下山予定になっていました。この時には、計画通り行動が出来ず憂鬱になって当たり前の状況の中で、素直にそれを受け流すポコさんのタフさに脱帽でした。

この追悼文を書くに際して、ポコさんの一生を少し詳しく知りたく、以前に謹呈していただいたポコさん喜寿記念の出版文集『わが登山人生』を読み返しました。そこに兄の最晩年の頃のポコさんとの不幸な不協和を改めて目にしました。この文集の中で、ポコさんが山岳部に入部されてから一流の登山家になれるまでに得られた山の仲間のことを「VI. 山の仲間、友人たち」に書いておられます。その二節「忘れ得ぬ人々 - 山の仲間への追悼」のなかに兄のことを「新人の時から育ての親—山口克」として4頁にもわたって書いておられます。特に不協和な関係になってからの筆は苦しいお気持ちの重さが覗われます。このような不協和が生じたきっかけは伊藤洋平先輩に対するポコさんと兄との評価の酷い相違がきっかけでした。結局、お互いがこだわりを水に流してスッキリしたきれいな和解に至らず兄は逝ってしまいました。とは言え、ポコさんは兄の死の間際まで、只管に兄の理解を得ようと限りなく「素直な努力を」続けられました。最後にお書きの文章からは、兄も死の寸前には手を握り合って終わりたかったと伺われるような様子が透けて見えます。

少し時代が後の私から観ますと、この不協和はポコさんと兄の関係に何か好ましくないことが有ったというわけではなく、二人の性向・性格は似ていながら、時代の移りに伴い二人の価値観に差異が生じ、それらが絡み合って生じた不協和であったように思います。ポコさんが京大に入学された時期は、大学制度が旧制から新制に移り変わった難しい時期でした。兄は中学校登山部で山を始め、三高山岳部で本格的に登山のエトス (ethos) を叩きこまれました。大先輩の鈴木信先生からの影響が圧倒的で

あったように思います。そして三高山岳部の登山のエートを新制京大山岳部にもしっかりと伝承しようとの強い理念を堅持しているようでした。私自身もその一部を植え付けられたように感じています。しかし、以前より方々の旧制高校山岳部出身の部員が入ってきた新制京大山岳部では難しい事でした。何処の旧制高校も独自のエートを堅持していました。中でも伊藤洋平さんと兄のエートスとの相性は大きく異なっていたようです。しかし、兄はポコさんが自分の体型と似ていて、万事に素直なポコさんが大変気に入って、必死に自分の登山のエートを注ぎ込んで新しい京大山岳部と AACK の支柱になってもらいたいと願っていたと想います。

それが、一流の登山家として認められるようになった時に、伊藤洋平先輩を高く評価されるのを知って愕然としたのでしよう。最後には兄も時代の変化、万物流転の理を悟り、最後の最後にポコさんと2、3言葉を交わし、心持を清くして旅立ったことと推察します。今また、時代は大きく変わろうとしております。山の登り方やその理念・エートスも変わっていくことでしょう。しかし、山登りの素晴らしさへの人間の憧憬は、人が人である限り変わりなく続くように想います。このことを、ポコさんをお手本にして心に留め、歩ける限りこれからも山歩きを続けたく念じます。

安らかにお眠り下さい。合掌。

平井ポコとの70余年

本仁久一郎

1950（昭和25）年の春、山岳部室で時のリーダー藤村良オンタイが言った。「金毘羅山の新人歓迎岩登りで、平井という体は小さいが、バランス抜群のがいた」。この話を聞いたのが、平井ポコとの70余年の始まりであった。1950年当時、新制1回生は京阪電鉄宇治線黄檗駅近くの宇治分校で、新制2回生は時計台向かい側の吉田分校（元三高）で、旧制1～3回生は各学部で受講。新制1回生は夏休み前の、国鉄福知山線道場駅近くでの岩登り予備合宿まで、上級生と顔を合わす機会は殆んど無かった。

その夏の劔岳真砂沢合宿には、卒業した先輩2人、旧制1～3回生と新制1～2回生の、約30人が参加した。旧制1～3回生と新制2回生の大部分は、旧制高校から入学してきたが、その前段階で浪人や留年、また軍隊生活や外地からの引揚げを経験した、大正生まれから昭和一桁前半までの、雑多な経歴の人間集団であった。それに対して新制1回生は殆んど新制高校からの現役入学組が占め、おとなしく幼い感じであった。新制2回生は1948年に旧制高校に入学したが、本来の3年修業を待たず、1949年の学制改革により就学を打ち切られ、旧制高校への欲求不満を抱きながら、新制大学に進学していた。劔岳合宿には8人（浪人や軍隊経験

者4人）が参加。新制1回生は劔岳合宿に参加10人。新制高校からの現役合格者8人。

合宿の夕食の後は毎晩、旧制高校を懐かしむ世代の、寮歌の蛮声合唱とストームが繰り返された。寮歌以外に六高伝来の、童謡「裏の畑」の替え歌も加わった。新制1回生は当初はバンカラの空気にカルチャーショックを受け、小さく静かにしていたが、徐々にその空気にも慣れ、聞き覚えた寮歌の蛮声合唱に加わるようになった。

そんなある晩ポコが突然、童謡「兎のダンス」のHな替え歌を歌い始めた。あの一番幼い感じのポコが、どこで仕入れてきたのか?! 上級生たちからやんやの喝采を受けたけれど、メロディーが蛮声合唱に適していなかったためか、皆に歌われることなく、リクエストに応じてポコがソロを聞かせてくれていた。

合宿解散後、ポコは山口克率いる東沢遡行パーティーに加わり、水晶→槍→上高地→徳本峠→島々のコースを踏破し、山口から多くの薫陶を受けた。この時以来の師弟の情は、山口が他界するまで続いていた（山口克追悼文集 p103～107 敬称略の根拠も記載）。

ポコの山岳部での通称は、初めはポコではなかった。人部当初、他の部員から新しい話を聞かされた時、「ふーん、ほんまか？ よう知っ

とんな！」と言うのが口癖であった。そんな彼を、何にも知らん赤ん坊のような奴と断じた、亡き廣瀬エトが「オギャー」と命名し、皆に広めようとしたと、彼自身が廣瀬の追悼文(AACK Newsletter No.56 p10)に書いている。ただこの通称は言い難かったので、あまり広がらなかった。一方、ある部員の下宿の飼犬の表情が彼に似ているということから、その犬の名前ポコを彼に転用し、今日まで彼の通称として定着してきた。

昭和30年代の初め、ポコは金沢大学工学部で教職に就いていた。同じ時期、高山日赤病院外科では斎藤Yが、また富山のパルプ工場では私Qが、それぞれ勤務していた。この3人はよく集まって、飲んだり食ったり駄弁ったりした。また色々な仲間や後輩たちが山の帰りに、富山駅から私に電話を掛けて来たり、寮へ訪ねて来たり、中には合宿が終わって北海道に帰省するに当たって、翌日朝の青森行き急行列車まで、寮に泊まっていく後輩もいた。ポコは松田カメと組んで劔尾根のアタックを繰り返し、下山したら必ず富山駅から電話してきて、駅前の一膳飯屋で、下戸のカメに合わせた夕食を共にした。

1957(昭和32)年12月、私は福島市の原木調達事務所へ転勤を命じられ、北陸トリオは分解してしまった。そしてその翌年、ポコはチョゴリザ隊員に選ばれ、初登頂の栄冠を獲得した。藤平先輩とポコの登頂成功が報じられた時の、斎藤Yの越中禪の一件(昨年8月の笹ヶ峰ネット掲載)は、登頂成功直後にYから手紙で知らされていた。

チョゴリザの年の秋、私は結婚することになり、故郷石川県小松市での結婚式に、Yとポコの2人が参列してくれた。席上、ポコにお嫁さんを世話したいと言う人が現れたが、この話は実現せず、横浜の熱烈なファンにアタックされたポコは、1960年6月に京都でこの女性と結婚式を挙げ、京都に新居を構えた。Yも既に京大の外科に帰っていたし、私も経営不振に陥ったパルプ会社に見切りをつけ、1961年に関西の企業に転職し、寝屋川市に居を構え、交流は今日に至っていた。

それから60年近く経った2018年6月17日、チョゴリザ60周年記念の、「探検大学シンポジウム」に参加して京大を訪れ、山極総長やポ

コの講演を聞き、ポコや高村デルファその他懐かしいメンバーと、久闊を叙することができた。同年8月5日に東山黒谷の金戒光明寺での桑原武夫隊長墓前の集いに、私は体調が優れず不参加。6月のシンポジウムがポコ&デルファとの最後の別れとなってしまった。

昨年8月3日、私はポコに「明日は何の日」と題するメールを送った。翌朝彼から返信「Q兄 今朝6:20の放送聞きました。初めてです。兄のお蔭、感謝感謝。関係者に知らせます。再見！」を受信。更に「今日は何の日」のメールあり。「今日は何の日のニュースを笹ヶ峰ネットに載せました。かなり反響があったので、それを貴兄にお送りしようと思います」と、彼のパソコンに届いたメールを、印刷して送ってくれた。NHKラジオ第1放送の「今日は何の日」のヒマラヤ関係では、ほぼ毎年1953年イギリス隊のエヴェレスト初登頂、1956年JAC隊のマナスル、1958年AACKチョゴリザ、1970年JAC隊のエヴェレスト、1975年の田部井淳子さん女性初のエヴェレスト登頂など。初めの頃は1936年の立教隊ナンダコット6867mが放送されたが、最近は聞かれなくなった。

同年10月24日、Yとポコに「NHKテレビにヤルンカンが映った」のメールを送信。「NHK

BS3のグレートヒマラヤトレイルの番組で、カンチェンジュンガ本峰と並んで、ヤルンカンの全景と、頂上での故松田隊員の映像、そして京大登山隊の紹介もあり、録画したので、もしご希望ならDVDを送ります」との連絡に、Yから送って欲しいとの返信と同時に、ポコが入院中でオペが必要かとの一報あり。その後12月7日に、ポコから「昨日退院、家は寒いね。体調不良です」とのメールを受信し、DVDを送付。11日に、「Q兄、DVD着きました。まだ体調はすぐれませんが、これを見て元気を出します」を受信し一安心。

ところが、12月21日に思いがけず、笹ヶ峰ネットから「もう一つの立山」と題する彼のメールを転送受信。「私今長期入院中です。どなたかビデオお願いできませんか」と。

23日に返信。「昨日ご希望の番組を収録したので、退院の連絡あり次第、自宅にDVDを送ります」と。しかし年内に退院連絡が無いまま、2020年は終わった。

2021年に入った1月4日、Yから電話あり、

ポコが再手術を受けた後、意識が戻らず大変危険な状態とのこと。去年約束したDVDを抱えたまま、早く回復してくれ！と願う日々が続いた。その願いも空しく、2月17日の朝日新聞朝刊紙上で彼の訃報を見つけた。

葬儀には体調優れず、コロナ感染予防に大事を取って、参加を見合わせ、弔電のみにて失礼することにした。逝去を悼み冥福を祈る常套句の後に、「七十年前の剣岳合宿の仲間がまた一人去り、本当に寂しくなりました。合掌」と付

け加えた。AACKの名簿を見たら、記載されている生き残りは、斎藤 Y、堀(旧姓森井)デカ、中島ダンナ、そして私 Q の、当時新制2回生だった4人のみになっていた。そうだ、もう1人、夏の剣岳合宿には参加せず、冬の笹ヶ峰合宿から仲間入りした、ポコの同期生で AACK 名簿に唯1人生き残った、井上トッキューも加えねばなるまい。

ポコよ、我々は現在全て90歳を超えた末期高齢者。近いうちにまた会おう、再見！

思い出の平井一正さん（ポコさん）

山本良三

最後にお会いしたのは2019年11月30日の学習院大学山岳部創部100周年記念祝賀会の時でした(写真)。学習院の芳賀孝郎さんのお招きで参加しました。ポコさんはお元気で、健康的な印象で、相変わらずの涼しげな眼差しは変わっていませんでした。

拙著『南アルプスからヒマラヤへ』(2018年1月26日発行：山と溪谷社)で、歴史を作った人々—AACKの群像—の中でポコさんを紹介した文章があります。これを転載させていただいて、追悼文の代わりにさせていただきたいと思います。

《私が初めてポコさんを見たのは、1964年(57年前)3月新潟県銀山平で開かれた日本山岳協会主催の海外登山技術研修会であった。ポコさんは、裏山を上がり下りするスキー練習で見事な山スキー技術を見せた。AACKが1958年に派遣したチョゴリザ(7654m)初登頂のサミッターであり、1962年サルトロ・カンリ(7742m)初登頂の遠征隊に参加したポコさんは、当時京大工学部助教授で、自信に満ち溢れていた。しかし、持参した心電計の変調を修理できずに困っていた。それを脇坂 誠さん(ザッカスさん)にからかわれていたが、山スキーの技術は参加していたAACKメンバーの中では出色であった。後日、彼は著書『初登頂—花嫁の峰から天帝の峰へ』の中で、次の様に述懐している。〈若いときは、40キロほど背負っても、常に先頭を切って滑っていた。たしかに木々の間を、低い姿勢でシュテムクリスチャニアで下り



2019年11月30日(学習院大山岳部創部100周年記念会)左から山本良三 平井一正 芳賀孝郎 高橋雅彦(学習院OB)

てゆく私の前に出る者は少なかった。山スキーは私にとって、若い人たちに優越感を持てる唯一のスポーツである)

ポコさんは、その後神戸大学に移り、カラコルムのシェルピ・カンリ(7380m)、次いでチベットのクーラ・カンリ(7554m)の初登頂を成功させ、雄峰二座の初登頂という金字塔を打ち立てた。

今も、ポコさんの胸には初登頂の熱い想いが息づいているだろう。

ポコさんをこれほどまでに駆り立てたAACKのパイオニア精神の影響は、確実に神戸大学山岳部に受け継がれたに違いない。そして、ポコさんは多くの優れた登山家を育てるといふ実績を残した。

1958年、藤平さんとポコさんが初登頂した
チョゴリザの報告書は、日本におけるヒマラヤ
遠征報告書の、一つの原型となったように思う。
53年の英国のエベレスト初登頂から5年後に
桑原武夫隊長のもとで成功した初めてのヒマラ
ヤ遠征記である。

チョゴリザの初登頂成功というニュースは、
各大学山岳部に多大な影響を与え、あまたのヒ
マラヤ高峰への登山計画に拍車をかけるきっか
けとなった。京大入学と同時に山岳部に入った
ポコさんは、前掲の著書に、当時のことについ
て印象深い記述を残している。

〈1950年（昭和25年）4月、私は京都大学
に入学した。新制と旧制に入り混じった動乱期
で、私は新制の二期であった。白線浪人といっ
て、旧制高校であぶれた学生も同時に入学した。
私は単調な受験生活に飽きていた。大学に入っ
たら何か一つクラブに入りたいと常々思ってい
た。しかし、昔から野球を始め球技は全て不得
意であり、どこに行ってもお荷物になることが
予想された。そうして考えているうちに、山岳
部ならどうかということが頭に浮かんだ。

およそ登山などしたことのなくせに、山岳
部なら上手下手はないだろう、せいぜい足を交
互に出して山を登ればいいのではないかと大
それたことを考えた〉、〈私の母は明治の生まれ
であり、昭和初期に富士山登山をしたこともある。
当時では珍しい女流登山家であった。きっと
その血がそうさせたのかもしれない。私は今
でも十分小柄であるが、当時はずっと小さく
華奢であった。体重も50キロにもなってい
なかつた〉〈略〉〈山岳部でやっていけるかど
うか心配であったが、登山を知らなかったこと
が幸いしたのであろう。もしキスリング一杯背
負っている山男の姿を見たら、入部をやめたか
もしれない〉。当時の山岳部に脇坂 誠さんの
いたことが、ポコさんやグローさんをヒマラヤ
へ向かわせることになった。

〈脇坂 誠さん：ザッカスさんは、常に山岳
部の部室にきてヒマラヤの話をしてくれた。
〈略〉私がチョゴリザの隊員に選ばれたのは、
彼の強力な推薦のおかげである。〈略〉私が今
日あるのは、ひとえに彼のおかげである。彼は
私の人間形成に大きな影響を与えた〉と記すほ
ど、脇坂さんはポコさんにとって、かけがえの
ない親友だったのである。ちょっとはにかみ感

のあるポコさんの涼しげな眼差しは秀才型人間
を感じさせ、グローさんの得意とする浪花節的
な人間力に欠けると思われがちな点もあるが、
そこは持ち前の初登頂に賭ける一途な情熱とパ
イオニア精神であらゆる障壁を突破してきた。
小さな体に物凄いエネルギーを宿しているの
は、そのパイオニア精神によるものと思わざ
るを得ない。若き日の山岳部時代に、“ヒマラヤ
に登る価値のある未踏峰が存在する限り、その
頂を目指すという”今西錦司のパイオニアスピ
リッツの影響が明確に感じられる。

やはり、今西スピリッツ恐るべしである。天
才リーダー今西とその仲間たちが作り出した
AACKという組織の精神が、世代を超えて着
実に引き継がれてきた証である。しかしながら、
当時山岳部に在籍した全員がヒマラヤを目指し
たのかと問えば、その答えは否となろう。

当の今西さんがその確率を“三割と踏んでい
る”と述べているように、10人いれば3人程
度にしか登山における今西精神が伝達されてい
なかつたとも言えるのである。

人生にはいろんなことが降りかかってくるの
で、その気があっても実現まで漕ぎ続けられる
人は限られてくる。そのような娑婆の中から第
一步を踏み出すには、成功体験は極めて重要で
ある。ポコさんは京大山岳部での実力が認めら
れて遠征隊員に選ばれ、その成功体験を26歳
にして得たのだから、その後の登山人生はまさ
にチョゴリザ初登頂が決定づけたと言えるだろ
う。一度ヒマラヤの初登頂に成功した者は、必
ず次の初登頂を目指す。これは歴史が証明して
いる。そして成功すれば、また次の初登頂を狙
うといった具合である。ただし、それは遠征隊
が成功すればいいのであって、自分が頂上に立
つことを意味するわけではない。

ポコさんの場合は、標高順にチョゴリザ、クー
ラ・カンリ（総隊長）、シェルピ・カンリ（遠
征隊長）の順となるが、いずれも7500m前後
の未踏峰であった。8000m級の未踏峰を狙う
場合（ほとんどは登頂されていた）は、酸素ボン
ベを用意しなければならず、遠征経費は大幅
に膨らむことになる。一方、7500m級の未踏
峰ならば、それなりに経費はかかるものの、努
力すればなんとかなる範囲内に収まる、と見ら
れていた。それゆえに、ヒマラヤ鉄の時代と言
われた7000m級未踏峰（著名な93座）の登頂

計画は、各国からの申請が目白押しの様相を呈していた。

しかし、未踏峰を有するネパール、パキスタン、中国当局はそのうちの一部しか登山に開放していなかったのので、登山許可の取得は並大抵のことではなかった。いうまでもなく、日本からの申請も多かったが、そのような状況の中から雄峰の許可を得ることは、多分に幸運の女神が微笑むかどうかにかかっていた。

ポコさんは幸運の星の下に生まれた人であった。もちろん当人の努力が並大抵のものではなかったであろうが、何とんでも目指す山の絞り方が優れていたのだと思う。山の選定にルールはないが、標高は、写真は、登頂ルートは、登り方は、アプローチは、登山許可を出す当局との交渉は、隊の規模は、隊員の選定は、資金集めの用途は、などなど決めねばならぬことがやたらと多い。初登頂登山計画と隊の規模という問題は古くて新しい課題であった。

初登頂のための適正人員は何人なのか。登り方は、極地法なのか、アルパインスタイルなのか。すべては隊員の人選いにかかってくるが、初登頂を目指す遠征隊だからといって隊員を無闇に増やすわけにゆかない。そこは隊長の

経験とセンスに関わってくる。

『初登頂』の序文で、藤平正夫さん（元 JAC 会長、チョゴリザのサミッターの相棒）は、ポコさんを“努力の大リーダー”として、〈平井君は一步一步困難を克服して、着々と大リーダーへと自分を作り上げていった〉とその足跡を称賛した。あとがき、ではポコさん自身が“色々な世代で、いい山と人に恵まれ、初登頂の喜びを味わうことのできた幸福をしみじみと思い、この実現にご援助賜った多くの方々に、あらためて感謝する。そして本書を読んでくれた人が、たとえ対象は登山でなくても、それぞれの関係する分野で、未知の領域の開拓に情熱を燃やしていただければ”と記している。

彼が初登頂した、または率いた遠征登山隊が、一人の犠牲者も出すことなく成功を収めたということは、登山を通して、自己を練り上げる努力はもちろんのこと、幸運な星の下に生まれて、見事な人生を生きただと見えよう。

長年にわたり、親しくお付き合い頂いた戦友を無くした寂しさを味わっています。心からご冥福をお祈りいたします。

さようなら、ポコさん。あの世でまたお会いします。

ポコさんは勉強家

横山宏太郎

私が AACK に入会した 1972 年ころ、平井一正＝ポコさんは神戸大学に勤務されていた。総会や木曜会などに出席されており、そこでお会いしていたわけだが、この一回り以上年の違う大先輩に対して、本名で呼んだ覚えがない。見た目も中身も優しいポコさんゆえに、自然にそうなのだろうか。

私が南極越冬（1972-74）に参加している間にヤルンカンがあり槍平の事故があり、帰国後も事故が続いた。なかなか元気の出ない時代である。それでも懲りない面々「カイ・グロン・コータロー」（甲斐邦男、森本陸世、横山）は大学院でごろごろして（ほかの二人には失礼か）ヒマラヤ登山を考えていた。

そんなある日、「AACK でいちばん勉強してはるのはポコさんや」と井上治郎さんが私に

言った。前後の会話は忘れたが、この言葉だけは今に至るまで忘れられない。宇治の防災研究所 5 階、中島暢太郎先生の研究室で井上さんが助手になったばかりのころ、その机があった大部屋でのことだろう。そのあとには、「おまえらも、見習ってしっかり勉強せえ」と続くのだろうと想像はした。「言わんでもわかるやろ」ということである。

ここでの「勉強」は、山、特にヒマラヤ登山に関する勉強の意味である。山探し、許可取得交渉、ルートの探索、登攀タクティクスから装備・食料、場合によっては募金まで、多岐にわたる。私はなかでも「山探し」を念頭に置いた言葉と受け取った。登りたい、いい山がなければ話は始まらない。

いい山はどこにあるのか。クォーター・イン

チ・マップもあったが、山岳雑誌「岳人」の付録について全12葉のヒマラヤ全域の概念図(山頂、尾根、谷、氷河などを図示する)が見やすく、それを頼りに昔の記録をたどったりしていた。チョゴリザ、サルトロカンリに続くカラコラムの登山となると、記録の少ない東部、シアチェン氷河北側やリモ氷河の流域が魅力的に映っていた。しかし残念なことに1974年にK12の事故があり、カラコラムは遠慮しようかという雰囲気になった。

一方、ポコさんは、1976年、神戸大学隊を率いて、シェルピカンリの初登頂を成し遂げられた。山探しから登頂成功、無事下山・帰国まですべてを指揮されたわけだが、姿も難しさも一級の山であり、たいへんご苦労があったことだろう。なるほど「勉強家」ポコさんにしてはじめてできることかと納得した。

翌年、私はネパールヒマラヤ、ランタン・リの偵察に向かった。ネパールで、未踏峰はないかと探した結果選んだ対象だった。とはいっても、全く手つかずというわけではなく、日本でも偵察に行った記録があった。それでも、正確な地図がない地域というのは魅力的だった。見れば実に美しい山で、ぜひ登りたいと思った。許可取得交渉では、開放されたら許可をだそうという約束をもらい、喜んだ。しかしいろいろな事情が絡み合って、ランタン・リ登山は実現しなかった(時報No.9、p57～)。

かわって浮上したのがランタン・リのすぐ北隣といってもよいチベットのカンペンチン峰だった。この山にポコさんはすでに目を付けておられ、1983年の登山許可が確約されていた。AACKはそれをポコさんの好意により譲ってもらう形で1982年の許可を得て、初登頂した。AACKにはナムナニ(グルラマンダータ)が大きな目標としてあったとはいえ、私も含めて、それ以外の山の勉強が足りなかったのではないか。

ポコさんは、必要となれば何事にもまっすぐに全力で向かう姿勢を貫かれたのだと思う。中国での登山が可能になった時には、中国語を独学で身につけ、中国登山協会の要人たちと親しく会話された。そういった積み重ねの結果としてポコさんの熱意と誠意が関係者に伝わり、極めて困難と見られていたクーラカンリの登山とその後のラサ-成都間の踏査の許可を得ること

ができたのだろう。

大変つらいことも思い出される。私たちのブータンヒマラヤ、マサ・コン峰初登頂(1985年)を受けて、ポコさんは神戸大学山岳会の関係者にそれを紹介する機会を設けてくださった。そこで何人もの方々と知り合うことができたのはありがたいことだった。そのなかに、船原尚武君もいた。彼は翌年のクーラカンリや1988年のチェルー山で大活躍し、ポコさんの期待通りに、神戸大学のエースに成長していった。船原君はまた地質・古地磁気学者として雲南に興味を持ち、1989年の梅里雪山科学隊に参加した。同年、私は梅里雪山第一次登山隊の登攀隊長を務めたが、力及ばず途中撤退し、1990年に第二次隊が派遣されることになった。船原君はこの隊に参加を希望し、私に問い合わせてきた。私は、彼にとっても隊にとってもよかれと思い、参加に賛同した。しかしそのことが、ポコさんが「掌中の玉を失った」といわれる悲劇に幾分か加担したのかもしれない、悔やみきれない思いがわく。

Newsletterにもたくさんの方の文章を寄せてくださった。なかでも、のちに『AACK人物抄』(2018)として冊子にまとめられた一連の人物評伝は、その「はじめに」に記された通り、「伝記などのある著名な人物よりも、あまり知られていないそういう人(縁の下の協力者)」を描いており、おかげで、お会いできなかった、よく知らなかった先輩方の姿を知ることができると。執筆にあたっては、文献の調査はもとより、親族や関係者を訪ねるなどして、確かで豊富な情報を得て進められた。「あまり知られていない人」が対象なので、実際には大変なご苦労があったことだろう。「勉強家ポコさん」ならではのこと、これも敬服のほかない。

ポコさんが研究・教育でも「勉強家」として大きな成果を上げられ、「二足のわらじ」を履きとおされたことは、ご自身の著書『わが登山人生』にも書かれ、よく知られているので、それとは真逆の不勉強者たる私がいまさら述べる必要もない。私は、井上さんの言ったとおり、こんな見習うべき理想的な見本があったのに、しかも折にふれ引き立ててくださったのに、かたちを真似することもできなかった。不肖の後輩として、いまはご冥福を祈るのみである。

皆がほっておけない得な性分—安岡良祐君を偲んで (2021年2月16日逝去)

栗田靖之

1960年、われわれは京大に入学して、すぐに山岳部に入部した。山岳部では、安岡良祐君のことをヤスとあだ名で呼ぶようになった。一回生の時、印象に残っているのは、西部構内の古い山岳部部室でのことである。何人かの一回生部員が雑談していた。そこに電話がかかってきた。そうすると電話機の側にいたヤスが「電話がかかっているで」とおおきな声で言った。その場にいた部員は、彼に「電話を聞いてくれ」と言ったら、ヤスが「俺は、電話に出たことがない」と言ったので、皆がびっくりした。高知には電話で話をしたことがない男がいるのや、と驚いた。それ以来、一回生の間では、高知は電話が普及していない日本の秘境らしいといわれるようになった。

こんな事もあった。彼が理学部の事務局に鉄道の学生割引証明書をもらいに行ったとき、事務の係員が「出身はどちらですか」と尋ねた。ヤスは出身学校を聞かれたとおもって「土佐高校です」と答えた。そしたら係員は、帰省先を尋ねていたらしく、帰省先に「土佐県」と書いた。ヤスは「俺は犬やないで」と答えたという。ヤスは真顔で、京都の人は高知県を知らないのやろか、といていた。

山岳部の仲間として、彼とは本当に365日のうち、300日は何らかの形で顔を合わせる生活をしていた。

ヤスは高校時代には柔道をしていて黒帯であったが、クライマーとしてのヤスは、雪を見たこともない南国育ちで、スキーも初めて履いたといていた。しかし岩登りではめきめきと腕を上げていった。彼の山行の記録を見ると、東谷廻行、小黒部谷廻行、祖父谷廻行、滝谷廻行・錫杖岩登りと言った渓谷の廻行から、秋の東鎌尾根縦走、積雪期の聖岳から北岳縦走、厳冬期の薬師岳から剣岳縦走、白馬主稜、明神岳南峰から北穂と続き、11月の北鎌尾根、夏の剣大滝登攀と先鋭的な登攀の記録を残している。

その中でも白眉の山行は、剣大滝の登攀であろう。私の手元に、1961年頃の新聞名も分か



らない小さな新聞記事の切り抜きがある。そこには「黒部峡谷剣沢に、だれも見たことがない日本一の大滝があると思う、という記事があったが、本当にあるのですか」という読者の問いがあって、その回答として関西電力樺平荘管理人の青山直義さん(58)の話が出ている。「2か月もかかって、測量のために400メートルもある剣沢の絶壁の中腹につり棧橋をかけながら進んだ。大きな滝の音が聞こえてきたが、水シブキがものすごくて一步も進めず、また奥をうかがうこともできずに、結局測量は中止してしまった」とある。当時この滝は「幻の大滝」であった。ヤスはこの剣の大滝に挑戦し、下部の登攀に成功して、この時の山行を京大山岳部『報告』11号に記録として寄稿している。数年前にも、彼のこの報告が登山雑誌『岳人』に引用されていたほどのがやかしい記録である。

ヤスは理学部の宇宙物理学いわゆる天文学を勉強していた。私は文学部であったので、よく二人で俺たちはどんな職業について、どんな将来になるのだろうかと話をした。

ある時ヤスは「卒業したら俺は教師になる」と言った。彼が教師の道を選んだのは、育ての母が高校の教師であったからだと思う。それと同時にヤスは、これからの日本は戦争をしてはいけないと強い信念を持っていた。そしてそのことを若い世代に伝えたいと願っていた。その背景には、彼のお父さんが先の戦争で戦死されたことが大きな要因であったからだと思う。

彼が神戸の松蔭高校の教師になって、物理学を教えることになったが、女子高生が物理の授業を興味をもって聞いてくれるだろうか心配していた。

何年か経った1978年、ヤスは「俺、結婚することになった。ついては仲人をしてくれ」と言ってきた。その話にびっくりした。仲人というのは学生時代の恩師か職場の上司などをお願いするものだと、私は思っていた。彼にそのことを話すと、「新婦の恩師は俺や」と言った。お嫁さんになる人は、ヤスのかつての教え子であった。なるほど新郎が媒酌人との二役をこなすことは無理だと分かった。職場の上司などの難しい人は苦手だということで、彼とは同級生であるが、私たち夫婦が、結婚式の司会者をするようなつもりで、媒酌人の役を勤めることになった。

ヤスは理学部へ現役で合格するほどの秀才であったが、彼は才能だけにとどまらず努力もした。そのよい例はスキーである。妙高高原にある松蔭高校の寮にコーチとして通ううちに、あれほど苦手だったスキーを見事に克服して上達し、スキーに関しては一家言を持つようになっていた。

しかしその一方で、ヤスはこれは自分の受け持ち範囲ではないと決めてしまうようなところがあつた。ながく付き合つて彼の性格が分かつてくると、ここから先はヤスの受け持ち範囲で

はないだろうな、と誰もががついつい助け舟を出してしまわずにはおられないことがよくあつた。その意味において、ヤスは皆に愛される得な性分をしていた。

彼が受け持ち範囲を超えていると認識していたことの一つに、外国人とのコミュニケーションがある。彼とは同回生の杉山スリコのいたタンザニアや、私の調査地であるブータンを旅行した。ブータンを旅行していた時のことである。夕食が終わつてラウンジでくつろいでいた。私はヤスとはすこし離れた席で他の人と座っていた。そしたら彼は近くにいた先輩の笹谷べべちゃんに「ウイスキー頼んでな」といった。べべちゃんから「自分で飲む酒ぐらい、自分で頼め」と諭された。ヤスは意を決してバーテンダーを呼んだ。バーテンダーは「ウイスキーは何にしますか」、「オンザロックですか、水割りですか」、「ダブルですか、シングルですか」とたずねてきた。彼はウイスキーの注文に成功した。私はそれを見て「おー、ヤスやるやないか」と驚きの声を上げてしまった。

彼は無類の酒好きであつた。学生時代から「月乃出」という居酒屋の常連だつた。ヤスは土佐の高知に生まれたかぎり、男でも女でも、酒が飲めないのは人間失格だと思つていた節がある。

ヤスは病を得て自宅で病床に就くようになって。そして今年の2月16日、今際の際に段々と意識を無くしていく中で、「ビール持ってきて」、「お酒は爛して」と奥さんと二人の息子に、うわごとを言つていたという。彼は最後まで見事な高知県人であつた。

フランスの小説家が書いたように、おいしい酒とご馳走を、腹いっぱい楽しんでレストランを出て行くお客のように、ヤスはこの世を去つて行つた。

第52回雲南懇話会 講演概要

山岸久雄

第52回雲南懇話会は2020年12月12日(土)、JICA国際会議場(東京・市ヶ谷)で開催されました。コロナ禍の下、約1年ぶりの講演会となりました。コロナ感染予防の観点から会場

定員が半分に抑制されたため、通常より少ない54名の参加となりました。その講演概要を以下に紹介いたします。

1. 「極寒のドルポ越冬 122 日間の記録」

ネパール探求家、美容師 稲葉 香

ドルポはネパール北西部に位置する平均標高 4000m の山間地域で、東西南北のどこから入るにも標高 5000m 以上の峠を越える必要がある。稲葉さんは 2019 年 11 月 11 日に日本を発ち 2020 年 3 月 11 日に帰国するまでの間、このような厳しい自然環境の村で約 3 ヶ月にわたり越冬した。講演では越冬を志すに至った経緯、越冬計画と準備について説明した後、越冬生活の様子を映像で紹介した。

稲葉さんは 2007 年から 2016 年にかけて、4 度にわたりドルポ地域を横断する旅行を体験し、その厳しい自然環境に魅了された。この地域で冬の生活を体験したいという気持ちが募ったが、すぐには決心できないでいた。そんな中、2018 年に西北ネパールのフムラ地方で約 1 ヶ月の単独キャラバンを行った。この旅は無人数帯での 2 週間の活動を含み、ネパール側からカイラス山を遠望。ナムナニ (7694m)、グナラ (6902m) を展望し、名もなき湖を探ね、全行程は 250km に及んだ。この旅を無事に完遂できたことでドルポ越冬の決意がかたまった。

ドルポ地域は冬、完全に周囲から隔絶される。稲葉さんは自分の滞在が現地の負担にならないよう、入念な準備を行った。越冬拠点をサルダン村と決め、越冬期間は 3 ヶ月になると見込んだ。その期間に必要な燃料、食料を事前に手配し、夏の間サルダン村にデポしてもらった。計画案として、雪が降り積もる前にドルポに入域し、越冬中は雪の状況を見ながら、近郊の村の訪問や河口慧海師の越境ルートの再確認を行い、またニサル村の冬の祭、ロサル (お正月) を見学、サルダン村の日常生活、気候状況などを記録することにした。これら、計画した調査項目は全部で 42 にのぼった。準備の経過と越冬中の様子が美しいスライドで紹介されたが、特に冬の祭の動画が印象的であった。

2. スライドショー「西ネパール 辺境に魅せられて—ドルポ、ムスタン、フムラ訪問の記録—」

稲葉 香

稲葉さんが西ネパールを最初に訪問したのは

2007 年。西ネパールの第一人者、故 大西保氏が隊長を務める西北ネパール登山隊への参加だった。その隊では河口慧海師の足跡の再調査、未踏峰カンテガ (アッパードルポのティンキュー村付近、6060m) 登頂など、貴重な経験を得ることができた。続いて 2009 年、同じく西北ネパール登山隊に途中から参加し、ムグ〜ドルポを横断した。これらの遠征で経験した「探検家の足跡」、「未踏峰」、「無人地帯」、「横断」が以後の稲葉さんの山旅の関心事となった。稲葉さんは 2012 年以降、自ら遠征を立ち上げ、西ネパールに通い撮影を続けている。これらの山旅の写真や動画は BGM 付きのスライドショー (1)〜(4) にまとめられたが、講演時間の制約により (2) は割愛し、(1)、(3)、(4) が上映された。

(1) シェイフェスティバル (2012 年、ドルポにて撮影)

シェイフェスティバルは 12 年に一度、チベット歴 7 月の満月を中心に 1 週間行われるチベット仏教の巡礼祭であり、起源は 800 年前に遡る。2012 年は丁度、その年にあたり、貴重な撮影の機会となった。

(2) アッパームスタンのハイライト映像集 (2014、2016、2017 年、アッパームスタンにて撮影)

(3) 河口慧海師の道 (2016 年、ドルポ及びムスタンにて撮影)

河口慧海師が越境した足跡を忠実に国境まで歩き、国境からはドルポ内部を横断し、ジョムソンへと 58 日間で 500km を歩いた記録の中から、国境までの映像を上映。

(4) フムラ、バラサーブ・レイクを探して (2018 年、フムラにて撮影)

ドルポ越冬の決意を固めてくれた 2018 年の西北ネパールの山旅 (1. に記載) の映像。

3. 「ツキノワグマと出逢ったらどうする」

東京農業大学森林総合科学科 山崎 晃司

動物生態学を専門とする山崎さんは、最近問題となっているツキノワグマによる人身事故に関連し、次のように語った。ツキノワグマと人との軋轢、特に人身事故の増加が社会的な問題となって既に 10 数年が経つ。特に 2016 年以

降は人身事故の増加が著しく、毎年のように事故が起きている。クマの捕獲数も多い状態が続いており、2019年には5,000頭以上が捕殺された。

このような状態になった背景として、中山間地域の集落が過疎化、高齢化し、かつて人が活動する場であった里山や耕作地が使われなくなり、そこに森林が復活し、クマが活動する場になったことが挙げられる。その結果、クマの活動域と人里が直接、接するようになり、クマと人が遭遇する機会が増えることになった。よく言われる「奥山のクマの生育環境の質が低下した」との指摘は当たっておらず、どんぐりなどの食物不足も、特定地域・特定時期における原因にはなっても、全体を説明する理由にはなり得ない。

クマは九州では1940年代に絶滅し、四国でも絶滅寸前となっているが、本州には世界でも希な、数万頭の集団が棲息している。本州では、今や「森のあるところにはクマがいる」と考えて行動することが必要である。2020年、上高地のキャンプ場で起きた人身事故はクマがキャンプ者の食糧を狙ったことが原因であった。北米では自然公園でキャンプする際は、食糧をクマが開けられない容器(ベアブルーフコンテナ)に収納することが数十年前から常識となっているが、日本でもこのような対策が必要であることを、この事故は教えてくれた。

本講演のタイトルは「ツキノワグマと出逢ったらどうする」であるが、実は、クマに出逢ったからの対策はお薦めできない。「クマに出逢わないよう、最大限の努力をする」ことが肝心であるとのこと。講演後、それでもクマに出逢ったらどうしようと山崎さんにお尋ねすると、クマスプレイは有効である。ただし、事前の練習が必要である。クマスプレイが無い場合、顔を守りうずくまる姿勢をとることを推奨された。

ツキノワグマは人よりはるか昔、数十万年前から日本の自然に適応し、世代交代を繰り返してきた「先輩」であり、日本の多様な生態系の一部を担っている。クマのような大型動物の住む森を歩く楽しさを今後も残していけるよう、われわれに何ができるか考えることが必要だと山崎さんは語る。

4. 「鷹と生きる 一東北・山形での鷹狩と暮らし」

鷹使い 松原 英俊

聞き手：明治大学体育会山岳部ヘッド
コーチ・炉辺会、フリーライター
谷山 宏典

「鷹と生きる—鷹使い・松原英俊の半生」(山と溪谷社、2018)を書いた谷山さんによれば、日本の鷹狩は長い歴史をもち、歴代の天皇、戦国武将、徳川將軍家や大名など、その時々々の権力者に愛好されてきた。しかし、明治になると鷹狩りには二つの潮流が生まれる。一つは権力者の鷹狩文化を受け継いだ「鷹匠」の流れで、小型のオオタカが使われてきた。もう一つは東北地方の山間農村で発達した狩猟の流れで、大型のクマタカが使われた。昭和の半ばまで、クマタカを使ったウサギ猟は冬ごもり中の副業として儲かる仕事であり、鉄砲撃ちを上回る数の「鷹使い」がいた。しかし、鉄砲の性能が向上するにつれ、鷹よりも鉄砲の方が効率的となった。鷹猟は次第に割の合わない仕事となり、「鷹使い」の数は減っていった。現在、日本でクマタカを使って実猟ができる「鷹使い」は松原さん唯一人となった。松原さんは1974年、「最後の鷹猟師」と呼ばれた杵澤朝治氏に弟子入りし、翌年に独立。以後、山中の小屋でクマタカと「鷹一羽、人間一人」の生活を送りながら独学で鷹狩の技術を身に付けた。本講演で松原さんは、独学中の苦労や、独立後4年目にして初めて獲物を手にした時の感動を語った。また、クマタカを獲物に向け飛び立たせる度に、そのまま去ってしまうのではないかと心配したそうである。松原さんはその後、月山の麓の山形県朝日村(現・鶴岡市)田麦俣に移り、結婚し、息子が生まれた。現在は天童市田麦野という山村に暮らしているが、この40年、毎年冬になると鷹とともに山に入り、狩りを続けている。彼はずっと「鷹狩をすること」「鷹とともに生きること」を自分の人生の中心に据えてきた。

松原さんは雑談的にご自分のエピソードも語った。学生時代、山歩きの途中でつかまえた蛇を下宿で飼い、共に生活していたが、それが逃げ出し大騒ぎになったこと、北海道で登山ガイド中にヒグマを発見。間近で見たくなり、お客を放ったらかきにしてヒグマを追跡してし

まったこと等々。動物への深い好奇心と確かな観察眼はファールブルの昆虫記を思わせる。この感性が長年にわたる鷹との暮らしを支えてきたのではないだろうか。クマタカ獺の継承についての質問があった。弟子入りを志す人はいたが、未だ適性のある人には出会えていないとのこと。また、獺に使うクマタカを得ることや飼育することも、とても難しいそうである。

5. 「昨今の日本のエネルギー事情を考える —揺れ動く国際エネルギー情勢を俯瞰して—」 一般財団法人石油開発情報センター 多田 裕一

多田さんは石油公団、その後、関係法人で石油・天然ガスの資源開発にかかわる仕事を長年続けてきた。その経験をもとに、日本のエネルギー事情、世界のエネルギー情勢、将来の見通しを、最新の図表を使い俯瞰的に語った。

日本は世界でも有数の技術力、経済力を備えた国に成長したが、国内のエネルギー資源は乏しく（2000年代の一次エネルギー自給率は20%以下）、大半のエネルギー資源を国外に依存する。そのため国際情勢の変化により資源供給が脅かされたり、価格高騰に苦しめられることがよく起きた（1970年代の中東戦争による第1次オイルショック、イラン革命による第2次オイルショック等）。こうした問題を解決するため、政府は1973年に資源エネルギー庁を設置し、エネルギー資源の安定供給のため、自主開発、省エネ、資源備蓄、資源の多様化、特に原子力発電の導入や天然ガスシフト等を積極的に進めた。

一方、20世紀後半に入ると、世界の経済活動増大による大気中炭酸ガス濃度の急上昇が地球温暖化、気候変動を招き、人類の生活環境に悪影響を及ぼすことがわかってきた。世界各国政府は1995年の第1回気候変動枠組条約締結国会議、1997年の京都議定書、2015年のパリ協定等を通じ、数値目標を掲げて炭酸ガス排出の削減に取り組むことになった。これにより世界的に脱炭素、再生可能エネルギーの導入促進といったエネルギー需給構造の変革が発生し、産業界はこれに沿ってビジネスモデルを見直す

ようになり、これに投資する金融機関の対応も活発化している。このような情勢の中、2011年、東日本大震災が起り、福島原子力発電所の重大事故が発生。原子力発電を大きな柱としていたわが国のエネルギー供給計画は大きな見直しを迫られている。

国際エネルギー機関は将来のエネルギー需給を予測するため、以下の4つのシナリオに基づき数値予測を行った。1：各国が公表済みの政策目標に沿うシナリオ（コロナ禍の需要低下が2023年に回復すると想定）、2：同上（需要低下が2025年に回復すると想定）、3：パリ協定に基づく政策を推進するシナリオ、4：2050年にカーボンニュートラル（炭酸ガス排出量を実質ゼロにする）を達成するシナリオ。

その予測によれば、今後10年間の世界の電力需要増加の80%は再生可能エネルギーが担い、中でも太陽光発電がその中心となる（現在、ほとんどの国で、火力発電所新設よりも太陽光発電設置の方が発電コストは安くなる）。化石燃料の内、石炭の需要は今後低下する。火力発電燃料に占める石炭の割合は2019年の37%から、2030年には28%、2040年には20%以下になる。天然ガスの需要は今後増加する。石油は今まで世界のエネルギー源の中核をなしてきたが、2030年までに需要の伸びは止まると予測される。

このような脱炭素化に向けた世界的な技術革新、エネルギー需給の変化に対応するため、日本政府は2020年10月、現エネルギー基本計画（2018年7月閣議決定）の見直しを決めた。さらに菅首相は10月26日、日本は2050年までにカーボンニュートラルを達成すると表明した。現在の基本計画「3つのE（エネルギー安定供給、経済効率の向上、環境への適合）+S（安全性）」を「より高度な3E+S」にするために、さまざまな取り組みを進めることが決まった。日本の一次エネルギーに占める化石燃料の割合は未だ高く（2010年度：81.2%、2017年度：87.4%）、今後、再生可能エネルギー（太陽光、風力発電など）の最大限の導入や新たな技術の開発（効率的な送電ネットワーク、水素燃料、蓄電池、カーボンリサイクルなど）が急務となっている。

2021 年度総会開催

2021年5月22日(土)、Zoom形式によるウェブ配信にて、2021年度総会が会員104名の出席(うちZoom参加28名、委任状出席76名、会員数196名)を得て開催されました。2020年度事業報告および収支決算、2021年度事業計画および収支予算、新役員、新会員などの議案が、その席上で承認されました。詳細はAACKホームページ(<https://www.aack.info/ja/kouekihoujin.html#jigyo>, <https://www.aack.info/ja/kouekihoujin.html#board>)をご覧ください。

併せて、同じくウェブ配信にて、AACK設立90周年を記念して、酒井敏明さん、岩坪五郎さんによる「ノジャック初登頂」講演会が開催されました。詳細は、ホームページをご覧ください。

コロナ感染が収まらず、今回は残念ながらウェブ開催となりましたが、来年は対面で総会を実施し、皆様と直に再会することを楽しみにしています。

(AACK事務局)

会員動向

訃報

安岡良祐 2021年2月16日逝去
新井 浩 2021年4月30日逝去
窪田順平 2021年5月26日逝去

入会

上原雄大 亀岡太郎 小林真結
佐藤 薫 佐山 葉 田中丈太郎
谷重和来 富森莞太 吉田巖嗣

編集後記

前号でお知らせした平井一正さんの逝去を受け、井上 潤さん、酒井敏明さん、岩坪五郎さんには、追悼文の寄稿呼びかけと編集作業へのご協力をいただきました。おかげさまで各方面からの30編により、たいへん充実した追悼集となりました。皆様にお礼申し上げます。

栗田靖之さんからは、同級生・安岡良祐さんの追悼文をいただきありがとうございました。雲南懇話会では新型コロナ禍のなか会合開催にはご苦労があったことでしょうか。事態の早い終息を願うばかりです。

今回はほとんどの方から早めに原稿をいただきながら、編集作業に手間取り発行がたいへん遅くなったこと、お詫びいたします。どうかこれからもご寄稿・ご協力よろしく願いいたします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2021年8月16日
原稿送り先：横山宏太郎

発行日 2021年7月25日
発行者 京都大学学士山岳会 会長 幸島司郎
発行所 〒606-8501
京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階)
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科 竹田晋也 気付
編集人 横山宏太郎
製作 京都市北区小山西花池町1-8
株土倉事務所